
変態超能力をプレゼント

ヒッツカラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態超能力をプレゼント

【Nコード】

N2845Y

【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】

もしも、変態になるけど超能力が貰えたら、君は貰いますか？

突然出会った占い師の老婆に、超能力を貰った少年。 政所 龍一。

しかし、超能力に目覚めると同時に少年は、新たな趣味にも目覚める。

それは、変態的趣味であった。

この物語は、超能力と変態とプチ工口のへっぴょ官能ストーリーです。

アクションもやります！

プロローグ

すべての授業が終わり、帰宅部の生徒たちが下駄箱の並んだ玄関から見える正門を目指して歩いて行く。

その横で運動部の生徒たちが、青春を費やして取り込む各競技に爽やかな汗を流していた。

県立蓬松高校の、放課後の景色である。

「なあ、龍」

「ん」

二人並んで歩く男子生徒。

背の高い生徒が、自分よりも背の低い生徒に話しかけた。

声を掛けられた生徒は、視線を少し上に向けながら返事をした。

背が低いと述べても175センチは有る。

背の高い生徒の方が、大き過ぎるのだ。

おそらくのところ190センチは有るだろう。

「なあ、暇ならカラオケでも行かないか？」

「え、またかよ……」

嫌そうな顔で言葉を返す生徒の肩に、長身の生徒が腕を回す。

「いいじゃあねえかよ、行こうぜ」

「どうせお前の歌の練習だろ、一人で行けよ」

「連れね〜こと言うなよな〜」

長身の生徒は、身長は高いが細身である。

髪型は坊主頭に近いが金髪に染められており、ブレザーの制服もだらしなく着こなしていた。

若干だがチャライ。

彼の夢は、ミュージシャンに成る事らしい。

しかし、顔は整っている方だが、メロディーは整っていない。

「おごりだったらいいよ。だって俺、今月の小遣い、あと1500円しか残ってないんだもん」

今月が始まって今日は10日目である。

月の小遣いは5000円だが、貰って直ぐに無駄使いを友好的にしてみましたのだ。

暫くは糊口をしのがなくてはならない。

「おごる金が俺に有ると思うか、龍」

「じゃあ、ひとりで行けよ。俺は一昨日買いまくった本を、家でゆっくり読んでいるからよ」

実のところ、欲しかった本は買いきれてない。

「あ……………」

今度は長身の生徒が嫌な顔を浮かべる。

「またオカルト雑誌か？」

「何か文句有るか。俺が世界の不思議に興味を抱いて何が悪い？」

「そんなことだから女にモテないんだよ。龍はよ」

龍と呼ばれる少年には彼女が居ない。

今年で高校二年生になる。歳は17だが、一度も彼女が出来たことがない。

顔は悪くは無い。だが、平凡な顔をしている。

成績も悪くは無い。だが、優秀な科目も無い。

スタイルも悪くは無い。だが、オシャレでも無い。

運動神経も悪くない。だが、体育の授業でも目立ったことは無い。

性格も控えめなところがあって、自分から前へ前へといった感じは無い。

まさに、平凡な高校生である。

その上、異性の前だとやたらと緊張してしまって、会話が上手く出来なくなる。

だから、女子にもモテない。

名前は、政所まつたけ 龍一りゅういち。

親しい友達には『龍』と呼ばれている。語尾を延ばすのだ。

龍一の一の字を、語尾を延ばす意味合いに使っている。

彼はファミリーネームで呼ばれる事を嫌っていた。

小さな頃から『まんどころ』と言う名前の響きのせいで、随分と揶揄された事があるからだ。

長身の生徒の名前は、小笠原おがさわら 卓巳たくみ。

龍一とは、高校に入学してから知り合った友達であるが、今では一番の親友と呼べる仲であった。

一年二年と二人は同じクラスである。

ちなみに彼には彼女が居る。

二人は何気ない日常の会話をダラダラと交わしながら駅前を目指して歩いていた。

田舎でも都会でもない町並み。

大通りには車が犇めき合って走り、背高い近代ビルが立ち並んでいる。

しかし、ビルの脇に在る小道に入って行けば、100メートルも進まないうちに住宅街に変わる。

一気に下町風景に変わってしまう。

凶悪な犯罪も少ない平和な町であった。

卓巳の自宅は、電車に乗って三駅越えた先にある。

龍一の家は、駅を越えた裏側の更に20分ぐらい歩いた所にあった。

まだ20年ものローンが残っているが、父親自慢の一戸建てである。

両親と姉での四人暮らしであった。

「じゃあな、龍。また明日。」

「またな。」

二人は駅前で別れる。

卓巳は駅の改札口を目指して行くが、龍一は駅前に在る本屋へと足を向けた。

今月の小遣いで買えなかったオカルト本を立ち読みする為であった。

龍一が本屋の前に到着すると、不思議そうな顔で足を止めた。

五階建てのビル。

一階二階は、すべて本屋だが、三階テナントには喫茶店と美容院が入っている。

四階五階は、会社事務所が幾つか入っていた。

本屋の名前は『三日月堂』。

このビルの所有者は、この三日月堂の店長の父親である。

いつも龍一は、この本屋で本を買う。

ここで手に入らない本は、顔見知りで仲の良い店長にお願いすると、取り寄せてくれる。

しかも、本が届くと携帯電話にメールで知らせてくれるし、お金がない時は来月の小遣いまで待ってもくれる。

だから龍一は、インターネットで本だけは買ったことが無かった。

それどころかここ数年は、この本や以外で本を買ったことが無い。

この通いなれた本屋ビルの前で、龍一が足を止めた理由は、本屋の入り口から離れたビルの端に、小さな机に行灯と水晶玉を置いて椅子に腰掛けた老婆の姿があったからだ。

小さな机の前には、A4サイズの紙で『占い、五千円』と書かれていた。

「占い師か……」

とても気に成る老婆であった。

矮躯の背を丸めて、ただじっと椅子に腰掛けている。

その顔は皺だらけで頭も白髪であった。

老婆の前を、幾人もの歩行者が過ぎていくが、誰もが老婆に視線すら向けずに無視していた。

龍一の足は、自然と老婆の方へと進んでいた。

「占いですか？」

老婆に声を掛ける龍一。

声を掛けてから自分でも驚いた。

どちらかといえば人見知りで内気な自分が、進んで見ず知らずの人に声を掛けるとは。

上から見下ろすような龍一を老婆がゆっくりとした動きで見上げた。細い目から僅かに黒目が見える。

「お客様じゃあないよねえ」

老婆が言った。

龍一は、思わず「うん」と一言返す。

客では無い。

1500円しか持っていない。

5000円は、月の小遣いに匹敵する金額だ。

幾らオカルト好きでも、占いなんかに一月分の小遣いは出せない。

では、何故、自分は、この老婆の前に立って、声まで掛けてしまったのだらうと疑問に思った。

その疑問に自分で回答を出すよりも早く、老婆が話しを続けて来る。

老婆の声は、乾いているが穏やかで優しくかった。

「じゃあ、欲しいのかい？」

「欲しい？」

「違つのかい？」

何かくれると言つたろうか。龍一は、僅かに首を傾げた。

「貴方は、超能力が欲しいのですよ？」

「えっ？」

はっとする龍一。

唐突な言葉だった。

超能力とは、やはりあの超能力の事だろう。

サイコキネシスとか、テレパシーとか、テレポーターションとかだろう。

何故に占い師の老婆が、唐突にそのような事を言い出したのか理解が出来なかった。

だが、龍一の心にイカヅチが落ちたような衝撃が走る。

超能力とは、オカルト好きの龍一が欲して成らない夢の能力であった。

家の勉強机の上で、何度鉛筆を手で振れずに動かそうと念じた事か。

授業中、隣の列の四つ前に座る女子生徒に、振り向いてくれとテレパシーを送った事か。

放課後、女子新体操部の更衣室を遠目に、分厚いコンクリート壁を透視しようと試みた事か。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁ったとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしい心眼を会得しているのかと、脅威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまう。

「じゃあ、あげてもいいわよ」

「えっ!？」

心臓が止まりそうな程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持っていませんよ……」

つつい口に出た言葉であったが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。しいて言うなら、『恋』かしらねえ」

老婆は言いながら頬を赤らめ横を向く。

ちよつとキモイ。

「でも、条件はあるわよ」

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何かあるようだ。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるか分らないと」

「難しい事は分ないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言うより、鍵を開けるような感じかしら」

この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くように……」

呟くように言った龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

パンドラキー。

パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。

心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。

この老婆は、今まで何人もの超能力者を生み出してきたと言うのだ

ろうか。

「まだ、条件はあるわよ」

「ほかにも？」

この時点で龍一の警戒心は、好奇心に飲まれていた。

条件と言ったのが、超能力を貰う為の代償でなく、貰った後の事を話しているからであった。

棚から牡丹餅状態の話に、目が輝き始めている。

「超能力を得た人は、仲間内では異能者と呼び合っわ」

超能力者が他にも沢山居るような言いようだった。

更に老婆は話し続ける。

「異能者になると、二つだけ性格が変わるのよ」

「性格が変わるのですか……」

それは何だか嫌だと思う。

「一つ目は、異能者は、異能者同士でしか恋愛関係に発展できなくなるのよ」

「異能者は、異能者しか愛せない？」

「そうなのよ……」

そう言い老婆は俯き加減で溜息をついた。

恋愛話ならば、龍一には関係が無い。

恋人も居ないし、今後出来る気配もない。

17歳にして半ば諦めムードである。

龍一は、一つ目の性格変化を何気なく無視した。

「二つ目は？」

「二つ目はね、新しい趣味のようなものにも目覚めちゃうのよ」

「新しい趣味ですか……」

何を言いたいのかわからない。

「そう、今まで好きでもなんでもなかったものが、急に大好きになっちゃうの」

「なるほど。本当に新しい趣味が芽生えてしまうのですね」

「そうそう、急に服のセンスが変わったり、味覚が変化したりするの。酷い人は、ウンコが大好きに成ったとか、そんな例もあるわ」

「ちょっと待って下さい！　ウンコが好きになるって問題でしょ！」

服のセンスが変わるぐらいは良いが、ウンコが好きになるは、文化人としてダメダメだろうと声を荒立てる。

「聞いた話だと、ウンコの写真を取りまくっているらしいわよ」

「じゃ、写真ですか……」

味覚が変わるの後にウンコの話がでたので、食するのかと勘違いしていた龍一は、誤解があったのだと分かり僅かに安堵した。

「この二つの条件が飲めるのならば、貴方を異能者にしてあげるわよ」

「無料で？」

「ええ、タダだよ」

腕を組みながら龍一は、親指と人差し指で自分の顎を摘まんで考えた。

超能力は、とても欲しい。

子供の頃から懇願して止まなかった夢だ。

しかし、ペナルティーが怖い。

どのような超能力を獲得できるか分らないのに、変態的趣味が備わるのも考えものだ。

素晴らしい超能力を得られるならば、多少の変態趣味に目覚めても

我慢できよう。

だが、なんの役にもたたないゴミのような能力を授かったうえに、ウソコを愛でるような趣味を好むようになった、それこそ人生の終末を遂げてしまう。

実に悩ましい。

この天秤のバランスは、博打の要素が強い。

龍一は、喉を唸らせ悩みに悩んだが、やはり結論は一つだった。

それでも超能力が欲しい。

龍一の覚悟が決まる。

少年が老婆に向かって深々と頭を下げた。

「僕に、超能力を下さい。僕を異能者にしてください！」

礼儀を正した隆一に白髪の老婆が微笑む。

「後悔しないわね？」

「はい！」

頭を下げたまま大きく返事を返す。

その頭に老婆が皺だらけの細い両腕を伸ばす。

軽く両手を頭に乗せた。

「じゃあ、貴方は今から私たちの仲間よ。今日から異能者よ」

龍一の頭の中で、何かカチツと音がした。

鼓膜から伝わって来た音でない。

心の中で鳴った音のようだった。

それと同時に、脳内が白く染まる。

視界も白く染まった。

すべてが純白に染まる。

まるで白紙のキャンバスのようだった。

そこに何かが現れた。

遠くから何かが飛んで来る。

クネクネと長い体を呻らせて飛んで来る。

蛇じゃない。

龍だ。

ドラゴンだ。

「これが、僕の超能力か……」

飛んで来る飛龍は、短い両腕に何かを抱えている。

よく見れば、ドラゴンの表情は歓喜に溢れていた。

目を凝らす少年。

その上空をドラゴンが渦を巻くように飛び回ると、抱えた何かをばら撒いた。

何かがフワフワと沢山落ちて来る。

「こ、これは!?!」

白、黒、赤、ピンクに水色。

それは、色取り取りのパンツ。

乙女の羽衣。

女性物の下着だった。

龍一は、綿雪のように降り注いでくる女性用の下着の中、ヨン様もビックリなほどの笑みで、両腕を広げながら微笑んでいた。

「パ、パンツだお〜」

言葉の語尾に、ハートマークが咲いている。

こうして少年の新しい変態物語が始まった。

変態異能者物語のスタートである。

ドラゴンとパンツの謎

頭の中の霧が、晴れて行く。

耳に町の雑音が蘇りだした。

目の前には、あの婆さんが居た。

椅子に腰掛けたまま呆け眼の龍一を、満面の笑みで見上げている。

「い、いまのは……」

純白の空間に現れたドラゴン。

そして、パンツの雨。

この婆さんが、本当に超能力をプレゼントしてくれたのならば、あれは幻覚でないだろう。

自分で見たのだ。確信できる。

ドラゴンとパンツ。おそらくあれは、龍一が授かった超能力と、新たな趣味の片鱗。

ドラゴンはカッコ良かった。

しかし降り注ぐ沢山のパンツは……。

それを思い出した龍一の顔が、不安に濁る。

「どっかしら？」

龍一を下から見上げる老婆が言った。

自分の両掌を眺める龍一だったが、何か変化があったようには感じられなかった。

「超能力が、本当に授かったのでしょうか？」

「そうじゃなくて」

首を傾げる龍一。

「な、何がですか？」

「私を見て、トキメキを感じないかしら？」

「ときめき……ですか……？」

苦笑いと共に訊き直す。

そんなもの、微々たりとも感じる訳が無い。

しかし老婆は、何かを期待するような眼差しで龍一を見上げていた。

「そう、トキメキよ。私を見て、キュンと来ない？」

「きませんが……」

龍一が素直に答えると、老婆の顔がどんよりと曇りだす。

肩から力が削げ落ち落胆に沈む様子がよく分った。

「またハズレなのね。今度こそ上手く行けばと思ったのに……」

そう呟きながら椅子から立ち上がる老婆は、そそくさと後片付けを始めた。

椅子から立つても、座っている時と背丈が変わらない。かなり矮躯のようだ。

椅子や机を折りたたみ水晶や行灯を鞆の中に仕舞いだした。

「ど、どうしたんですか……」

「今日はもうおしまい。疲れたから帰るのよ」

後片付けを終えた老婆は、荷物を背負うと駅の方に歩き出した。

龍一は、とぼとぼと歩く老婆の後姿を見送る。

老婆も疲れたと言っていたが、何故か龍一も疲労感を強く感じていた。

体全身が重いし、頭にまだ靄が掛かっている気分が続いていた。

ガラス越しに本屋の店内を覗きこむ。

三日月堂の店長が、本棚の整理をしているのが見えた。

「今日はやめておこうか……」

立ち読みが目的で三日月堂に立ち寄る積りだったが、ここまで来て気分が乗らない。

龍一は、踵を返して駅を越える為の跨線橋を目指す。

帰宅の路に着くまでの道中、龍一はずっと考えていた。

自分が得た超能力とは、一体なんだろう。

老婆曰く、どのような能力に目覚めるかは分らないとの事だった。

サイコキネシスやテレキネスのような、オカルトでもポピラーなものだろうか。

それとも厨二ばい個性的な能力だろうか。

スタンドやミュータントのような。

もしかしたら車輪眼とかギアスとかは……ないだろう。

それに強い弱い、使える使えないも大きな問題だ。

せつかく得た超能力でも、えつぴつを転がす程度のサイコキネシスや、長年連れ添った夫婦が「あれ取ってくれ」「お醤油ですね」「みたいなテレキネスではガツカリにも程がある。

だが希望は、白昼夢で見たドラゴンだろう。

きっと自分に目覚めた超能力は、ドラゴンに関係した能力だろう。

しかし一方で不安なのは、降り注いできたパンツである。新しい趣味が、同時に不安を扇いだ。

「パンツか……」

呟きながら視線が、近くを歩く女性に向けられた。

どこかの会社員であろうか。二十歳ぐらいの女性が、スーツに短いスカートを履いて龍一の前方を歩いていた。

自然と龍一の視線が、女性の下半身に落ちて行く。

スカートから伸びる美脚が綺麗だった。ヒップも形が良い。

いったい彼女は、どのようなパンツを履いているのだろうか。

やはり大人っぽいレースのパンツだろうか。

白だろうか、黒だろうか、それとも情熱の赤だろうか？

ノーパンなんて有り得ないだろうが、そんな変態だったらガツカリするな。

パンツは文化人の嗜みとして履くべき代物だと思う。

龍一は、そのような妄想を巡らせながら真っ直ぐに歩く。

女性は龍一が向う道とは別の方へと曲がっていた。

何故か名残惜しさを感じる。

今度は前方から自転車に乗った他高の女子生徒が走って来る。

短いスカートが、風に靡いて際どく揺れていた。

見えるか！

心で叫んだ龍一の姿勢が若干沈む。

さりげなく、出来るだけさりげなく、好奇心のままに行動する。

「ちっ、残念……」

見えなかった。

龍一とて年頃の高校生だ。異性に興味を抱く。

しかしここまで異性のパンツが気に成る事はなかった。

まだ龍一は、自分の中に芽生えた新たななる興味に気付いていない。

住宅街に入った隆一の周りから人氣が途絶える。

静かな住宅街では殆ど人とはすれ違わなかった為、再び超能力に付いて考え始めた。

一つ一つ自分が知りうる超能力のタイプを、潰して行くように試してみるしかないだろう。

それで自分の超能力が何かが解るかもしれない。

自室に帰れば様々な超能力を記載した本が幾らでもある。

結局あれこれ悩んだ結果、自宅に到着するまでには何も回答が出なかった。

「まあ、あせる事はないよな」

そう言いながら龍一が玄関のノブを捻ろうとした瞬間、唐突にカシヤとカメラのシャッターを押したような音が聴こえた。

「ん?」

後ろを振り返る龍一。

誰も居ない。

なんだろうと思いい周囲を見ますが、これといって不審なところは見当たらない。

静かな住宅街。辺りの色が、夕焼けの為、オレンジ色に染まりかけていた。

いつもと変わらない近所が見えるだけで、歩いている人すら見当たらなかった。

「空耳かな」

気のせいだろうと、そう思った。

扉を開いて「ただいま」と声を張ると、キッチンの方から若い声で母が「おかえり」と明るく返して来た。

そのまま階段を駆け上った龍一は、自室で制服から私服に着替えるのと、ぎっしりと詰まった本棚の前に立つ。

「え」と、これとこれと……」

数冊の本を手にとると、ベッドに寝そべった。

どれもこれも幾度と読み返した超能力研究者の本である。

超能力を科学の目線から集録した本だ。

「参考になるだろう」

龍一は、夕食までの時間を、結局読書に費やした。

窓の外は、もう暗く成っていた。

時計の針は、七時を刺している。

二十分ぐらい前に姉も帰ってきた様子だった。

そろそろ父も帰宅する時間だろう。

「もう、こんな時間か」

もうじき夕食だろうと部屋を出て一階へと降りていく。

結局、自分の超能力が何かは解らなかつた。

冷たい姉と奇跡の母

龍一が部屋を出た直後、階段を駆け上がって来るように、一階からスパイシーを良い香りが鼻に届く。

「今日はカレーライスか〜」

龍一の母が作るカレーは実に美味しい。

スーパーなどで市販されている出来合いの固形ルーを使わずに、幾つものスパイスを混ぜ合わせて本格的なカレーを作るのだ。

作り方は、料理本で習ったものに、更なるアレンジを加えたオリジナルの一品らしい。

龍一の母は、基本的に何を料理しても美味しく作る。

結婚する前の夢が、料理師に成る事だったらしい。

「カーさん、ご飯まだあ〜」

階段を駆け下りた龍一が、そう言いながらリビングに入ると、テレビの前のソファーには、雑誌を片手に持った姉の虎子が座っていた。

龍一がリビングに入って来ても顔すら上げない。

GパンにTシャツ。黒髪を腰まで伸ばしている。

家に居るとは随分とラフな格好をして居るが、入社時は堅苦しいレ

デイススーツに身を固めたガチガチの公務員だ。

短大を卒業後、市役所に勤めている。

性格はかなりキツイ。

「龍くくん。お父さんがまだだから、先にお風呂に入ってきたさい」

台所に立っていた母が振り返ると我が子に微笑みながら言った。

地味な服装にエプロン姿の母は、今年で39歳である。

19歳の時に姉の虎子を出産した。今の姉と同一年にだ。その二年後に龍一を儲けた。

しかし二児の母とは思えないほどに容姿は若々しい。

見た目には、20代後半にしか見えない。

近所の人には、奇跡の39歳と呼ばれているが、性格はおっとりで、時折じれったくもなる天然キャラだ。

母のつかさと姉の虎子は、歳にして20歳近くも離れているが、並んで歩けば姉妹にしか見えないのだ。

美形なのか化粧が上手いのかは龍一に判断できないが、顔もスタイルも綺麗で良く似ている。

だが、性格だけは似ても似つかない。

「ねーちゃんは、風呂入ったの？」

「入った」

ファッション雑誌を読む姉が、素っ気無く答える。

龍一は、なんだかしらけ気分でリビングを出た。

姉との会話は、ここ最近いつもこんな感じである。

昔は弟思いで龍一を可愛がり過ぎて苛めに成るぐらい構ってくれていたのに、いつの間にか冷め切った兄弟関係に成ってしまっている。

龍一は、バスルームの脱衣所で衣類を脱ぎながら、洗面所の鏡で顔や背中を確認するように眺めた。

「これといって変化は無いか……」

肉体の変化。

まさかと思うが念の為である。

アメコミのミュータントみたいに、容姿が変貌しては堪らない。

超能力者に幼い頃から憧れていたが、モンスターには成りたくない。

しかし鏡で見るからには、それは無いようだった。

全裸になって今一度全身を見回し確認する。

「異変は無いな……」

安堵した龍一は、洗濯機に手を掛けて足の裏も確認する。

確認が終わってから龍一は、自分がここまで心配性だったかと苦笑う。

ちょっと過敏に成りすぎていると反省した。

「それにしても俺の超能力って……。とりあえず風呂に漬かりながら考えるか」

そう呟いた龍一の視線が、手を掛けていた洗濯機の中に落ちた。

「ん……」

龍一の視線の先には、先に風呂に入った姉の物だろうか、それとも母の物だろうか、どちらの物が判らなかったが、女性物も下着が入っていた。

白いパンツである。

「……………」

静かに固まる龍一。

洗濯機の中の下着を凝視する。

不思議なぐらい冷静だった。

まるで花瓶に活けられた花を觀賞しているような気分である。

頭の中から先程まで考えていた超能力の悩みが消え去っていた。

代わりに到来した思考は、止まらない程の好奇心であった。

「うむむ……」

自然と龍一の手は、洗濯機の中へと伸びていた。

温もりを失った白いパンツ。それをしっかりと掴んで拾い出す。

「使用後だよな……」

洗濯機の中に入っていたのだからそうだろう。

「これは……、この感情はなんだろう……」

自分でも戸惑いを感じていたが、好奇心がそれを上回る。動きは止まらない。

洗濯機の中から取り出した白いパンツを両手で持つと、眼前で広げ
る。

これが、いけない事だとは理解できていた。

これが、母か姉の物だとも解っていた。

これが、変態行為だとも……。

「へ、変態行為……」

その言葉を思い描いた瞬間、老婆の言葉を思い出す。

超能力と共に芽生えるもう一つの感情。新たなる趣味。

今何が自分に起きているかが理解できた。

自分に芽生えた新たななる趣味は、おそらくこれだろう。

思い当たる節もある。

今日の帰り道。女性とすれ違う度に、下着の事を考えていた。

間違いないだろう。

だからこそ、目が放せなかった。

パンツから。

刹那、扉が開く。

「龍。シャンプー切れてたから新しいの持ってきてやったわよ」

姉の虎子である。

新しいシャンプーを持った姉と、パンツを持った弟の視線が合う。

しかも、龍一は全裸であった。

硬直する二人。

空気も凍り付いていた。

「あ……、あんた……」

龍一の視線が、姉からパンツに戻る。

更に、自分が全裸であることも肉眼で股間を見て確認した。

「ねーちゃん、これには深いわけが……」

言い訳のしようがなかったが、やっぱり言い訳がしたい。

「それ……、私の……下着……」

「わざとじゃないんだ……」

当然ながら龍一の言い訳は、姉の耳に届かなかった。

姉の虎子が、弟の為に持って来た新しいシャンプーを床に落とす。ゴトンと音が床で鳴る。

一方、弟の龍一は、新しく芽生えた趣味に力が籠もり姉のパンツを落ともしもしなかった。しっかりと持っている。

「おかーいさーいん！」

姉が叫びながら走り出した。

まずい！！

「違うんだ、ねーちゃん。話を聞いてくれ！」

龍一も走り出す。

全裸のままパスルームを飛び出して姉の後を追って廊下を走った。

自分が全裸である事を、再び忘れていた様子だった。

その時である。

「ただいまー」

玄関の扉が開いて父の源治が帰宅してきた。

「きゃああああああ、変態　　！」

「ねーちゃん、誤解だつてばー！」

「……」

玄関で硬直する父、源治。

家族の為に今日も厳しい労働にせいを出し、残業を終えて帰宅してみれば、全裸の息子が両手で白いパンツを持ったまま姉を追いかけている光景だった。

家庭崩壊。

源治の脳裏に、その言葉が過ぎると片手から鞆が落ちた。

娘の悲鳴が、まだリビングから聴こえて来る。

「終わったな……」

政所家にはカレーの良い匂いだけが平和そうに広がっていた。

幼馴染はボーイッシュ（前編）

食卓に並ぶカレーライスとサラダの器を前にして龍一は、父の源治にこっつてりと絞られていた。

姉は弟を変態変態変態と連呼しながら二階の自室にひっこんでしまいい出て来ない。

こちらもかなり怒っていた。

姉の部屋に夕飯を運んだ母が、お盆を片手にリビングに戻って来た。

一通りの説教を怒鳴った父が落ち着くまでに30分近くの間が掛かった。

流石に龍一も凹んだ。

父の源治は、かなり硬派な性格だ。解り易く言えば、元ヤンである。

現在45歳。仕事は土木建築会社の事務職を務めているが、スーツを着た姿は身形を崩していないヤクザに見える程に凄みがある。

しかも右頬には、刃物で切られたような派手な古傷があるのだ。

尚更、堅気には見えない。

頬の古傷に関して父は訊いても語らないが、母曰く、父は若い頃から外見とは裏腹に真面目な性格だったらしい。

喧嘩もしない、博打も打たない、お酒は飲むが飲まれない。まして

や弱い者苛めなんか有り得ないとの事らしい。

少なくとも母の目には、そう映っていたようだ。

だが、父の若い頃の知り合いと言う人が、たまに家へと尋ねてくるが、どの人も強面である。

しかも殆どのお客が、吉本芸人でもないのに父のことを「兄さん」と呼ぶのである。

その事から父の若かりし時代に、どれ程のやんちゃを仕出かしていたかが推測できた。

間違いなく元ヤンキーである。

しかも、かなり格上のヤンキーだ。

だから父に怒られるのは、たまらなく怖い。

おそらく龍一は、一生父には逆らえないだろうと考えていた。

龍一にとって父親は、身近に在りながら最大の壁なのだろう。

しょんぼりと気を落とした龍一が食事を終えて自室に戻る。

階段を登る足が、とても重い。

まるで鉄球付きの足枷でも付けられた気分だった。

「ああ……、殺されるかと思った……」

眩きながらベットに倒れこむ龍一は、うつ伏せの体制で枕に顔を押し付けた。

まだ思考回路が恐怖でちじこまっている。超能力に付いて考える余裕が精神力として残っていなかった。

「もう駄目だ……、今日はもう寝よう……」

寝巻きに着替えようと龍一がベットから起き上がった時である。カーテンの閉められた窓が、外からノックされた。

「月美かな」

龍一がカーテンを開けると、窓ガラスの向こうに見なれた人物が直ぐ側に居た。

月美とは、隣の家に住んでいる幼馴染の女の子だ。

月美の部屋は龍一の部屋の向えにある。家と家がかなり接近している為に、屋根を伝って来れるのだ。

笑顔の月美が窓の外で手を振っていた。

髪はショートヘアに気の強そうな顔立ち。

白いTシャツに水色ノクトップを合せている。

下はひらひらとしたミニスカートを履いていた。

胸のサイズはほどほどだがスタイルは悪くない。
スレンダーで綺麗だと思う。

健康的な生脚が艶々していて魅力的だった。

歳は龍一と同じ年であるが、通う高校は違う。彼女は隣町の女子高に通っている。

龍一が窓の鍵を開けると、彼女の方から窓を開けて室内に上がりこんで来た。

「こんばんは、龍一ちゃん」

笑顔で挨拶をする月美は、屋根の上を渡ってくる際に履いていたサンダルを脱いで窓の外に下ろした。

窓枠を間にくの字になってサンダルを置く月美の仕草に龍一が、「よう、月美」と挨拶しながら身を屈める。

パンツが見えそうで見えなかった。

月美は龍一が気さくに話せる数少ない女子の一人である。

「月美、どうした？」

「どうしたは龍一ちゃんの方でしょう。虎ねちゃんも叔父さんもかなり怒ってたじゃない」

「いや、まあ……」

どもる龍一。バツの悪そうな顔をする。

おそらくは騒動と説教の大声が、隣の家まで届いていたのだろう。流石に恥ずかしい。

龍一がベットに腰を下ろすと月美は勉強机の椅子に腰掛けた。

「まあ、虎ねくちゃんが怒るのも分るわよ。可愛い弟がさ、まさか脱衣所で自分の下着を觀賞してれば幻滅の一つもしちゃうよね」

「そ、そこまで聞こえてたのか……」

更に肩を落とす。

椅子に座る月美は足を組むと、膝の上に肩肘を付いて顎を置いた。

それから少し怒った顔で言う。

「龍くちゃん、なんで虎ねくちゃんのパンツなんか手に取ったのよ？」

怒るように言う月美から俯いて顔を逸らす龍一は、大きな溜息を付いた。

父にも同じことを大声で問われたが、出来心としか答えを返せなかった。

昨日までは、室内に母や姉の下着が乾してあっても気にすらならなかった。

それが、あの婆さんに出会ってからだ。急にパンツが気になりだしたのは。

今も足を組む月美のスカートの奥が気に成っている。

正直、月美は可愛い。

今日は珍しく女性ぽい服装だが、普段は髪型も服装もボーイッシュなファッションを好む。

小さな頃は殆ど男の子に見えたが、高校に入学した頃から服装も徐々に女の子らしくなり、発育の遅れていたスタイルも女性らしく成って来ていた。

ボーイッシュキャラからお姉さんキャラに生まれ変わろうとしている節が見られた。

女子高でも一年の頃は王子様キャラで通っていたらしいが、最近は何月美お姉さまと後輩からは慕われているそう。

そのぐらい美形であることは間違いない。

「虎ねちゃんも、最近ますます美人に磨きが掛かってきてるけどさ。龍ちゃん、流石に身内のパンツ見て興奮てのはねえ。しかも洗濯機から取り出したところを見つかるとはねえ」

そうだ、タイミングが悪かったのだ。

いつも通り、姉の後、お風呂に入ろうとしたら、たまたま洗濯機に投げ込まれていた下着に目が落ち、思わず手に取ってしまい、そこ

を姉に見られてしまった。

そうだ。

たまたまが偶然の如く重なり合い、悪いタイミングを積み重ねるように生み出してしまったただけだ。

言い訳だが、己で己を正当化しなければ、死んでしまいそうな気分であった。

「反省している……？」

「してる……」

俯き、頂垂れて、力無く答える龍一。

なんとも寂しそうな顔を見せる龍一を心配したのか月美が眉を顰めた。

そして、椅子に座りながら組んでいた脚を解いて、今度は両膝を合わせるように両掌を乗せる。

恐縮した姿勢で月美が言った。

「そんなにパンツ……、見たい？」

「見たいと言いますが、なんと言いますが……」

「ちょっとなら、私が見せてあげようか……？」

「えッ！」

目を見開きながら瞬時に頭を上げる龍一とは裏腹に、月美は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

照れている！？

だが、それが可愛い！！

幼馴染はボーイッシュ (後編)

「な、何言ってるんだよ、月美……」

龍一の言葉が震えていた。

動揺している。

生唾を飲んで喉を鳴らした。

「だってほら、私ばかり見ているのも悪いし……」

「……はあ？」

気恥ずかしそうに訳の分らない言葉を返した月美は、天井の隅っこを見詰めながら赤面していた。

沈黙。

硬直した龍一が、月見の顔を凝視する。

一方の月美は、沈黙に時折負けたのか龍一をチラ見するが、直ぐに視線を天井の隅に戻すを繰り返していた。

二つの疑問。

ボーイッシュな幼馴染の乙女が、突然自分のパンツを見せてあげると言うのだ。

願ったりな申し出であるが、何故にそのような事を言い出したのが分らない。

そして、その後に言った言葉。

自分だけ見ているのも悪い。

言葉の真意が不明である。

だが、しかし！

「パンツが……見たいです……」

消え去りそうな小声だったが、龍一の本意であった。

「誰の……、誰のパンツが見たいのよ？」

未だ天井の隅を見る月美が、自分の名前を言わせようと振ってくる。

誘われているのか？

それともおちよくられているのか？

畏か！？

釣られるままに月美の名前を口に出したら、「嘘に決まってるじゃない、龍くちゃんキモイ」。あはははははあはあくん」とか言われて馬鹿にされるのでは。

そのような疑いも想像できたが、すすくと育った健康美溢れ出る幼馴染の新鮮なパンツも凄く見たかった。

「ちよつとて……、今ここで？」

とりあえず質問で探りを入れる。

月美は細い首で、一度だけ頷いた。

「マジですかあゝ……」

思わず出た言葉に月美が「マジですよ……」と小声で返してくれた。

月美は幼馴染だ。小さい頃に、幾度となくパンツを見たし、何度も一緒にお風呂にも入った。

そう言う仲だ。

だが、それは子供の頃の話。過去の思い出に等しいし、その頃の月美を龍一は、男の子と思っていた。

彼女を女の子だと意識するようになってからは、裸どころかパンツすら見た事が無い。

そして、別に見たいとも思っていなかった。

しかしながら今は、見たい。

力一杯、見たいのだ。

懇願している。

ここは賭けに出るべきだろう。

例え賭けに負けても、ただ馬鹿にされるだけだ。

しかし賭けに勝てば、現役女子高生が身に付けたままの、生のおパ
ンツ様を拝めるのだ。

勝負に出ない理由が無いだろう。

「龍ちゃん、見る？」

龍一が打算的な思慮に励んでいると、月美が無垢に問う。

隙を突かれたような表情で龍一が、「うん」とハッキリとした抑揚
で答えた。

視線を決して合わせようとしない月美。

視線を月美の顔から外そうとしない龍一。

最近大人びて来たと感じていた幼馴染の表情が、随分と幼く見えた。

室内の温度が、少し上がったような気がした。

二人の顔が、一段と赤く熱る。

黙ったまま椅子から立ち上がった月美が、ベットに腰を下ろしてい

る龍一の前にゆっくりとした足取りで歩み寄った。

龍一の眼前で、月美のミニスカートが揺れていた。

細い体をモジモジさせている。

控えめな膨らみを見せる胸の前で、両手の指を落ち着き無く絡ませている。

月美の全身の肌が、桜色に染まっている。

「ちょっとだけなんだからね……」

構わない、ちょっとでいいから見たかった。

龍一の目が血走る。

期待に心が膨らみ、若さで別の場所も膨らむ。

しかし、モジモジタイムがじれったく続いた。

待ちきれなくなった龍一が、幼馴染の表情を窺おうと上を向く。

一瞬だけ二人の視線が合ったが、素早く月美が視線を逸らす。

顔は真っ赤だった。

とても龍一を騙そうとしている様子ではないし、演技とも思えなかった。

それを察した龍一の期待が、更に膨らんだ。

畏じゃない。

確信できた。

ならば待とうと決心する龍一。

決心が付かないのは月美の方に見えた。

言ったはいいが、なかなかパンツを見せようと動けない様子だった。

だが、その恥じらいが甘美なまでの蕩けるような空気を漂わせる。

黙り込む二人。

静かな部屋に、時計の秒針が刻む音だけが聴こえて来る。

下唇を噛む月美。

龍一が幼馴染の顔を見つめていると、月美の両手がついにゆっくりと動き出した。

その動きに龍一の視線が下に戻る。
待っていましたと心が躍る。

月美が両手の細指で、自分のミニスカートの裾を摘まんだ。

龍一の鼻息が荒くなり、時計の微音を掻き消す。

心臓の弾む音が、直接鼓膜に届いて邪魔くさい。

「と、特別なんだからね……」

言葉と共に月美のミニスカートが、少しずつ上昇して行く。

綺麗な生足が、少しずつ見える量を増やして行く。

秘密の花園を隠すカーテンが徐々に幕を上げる。

目が放せない。

逸らせない。

瞬きすら忘れてしまう。

龍一の双眸が、異常なほど赤くなっていた。鼻血も出そうである。

刹那。

「おおっ！」

見えた。

少し見えた。

よく判らないが、僅かに見えた。

更に露出は増えて行く。

白！

否。

青い横しま！

シマパン！

ナイス、ボーイッシュ！

全部ではないが、間違いなく見えた。

「ここまで！」

静かだった部屋に張りのある月美の音が響くと同時にミニスカートの裾が下ろされた。

「もうちょっと！」

いきなりポリウムを上げた月美の声に釣られて龍一も大きな声を上げてしまった。

「だーめ！」

そう言って、あっかんべーと舌を出した月美が、踵を返して入って来た窓へと動く。

ベッドから腰を浮かせた龍一が、片手を伸ばすが届かない。

敏捷に窓の外へ出た月美が、上半身だけを反して手を振った。

いつものように微笑んでいた

明るく。

元気良く。

そして、優しく。

「おやすみ、龍ちゃん」

その言葉を最後に月美は、自分の部屋に窓から入りカーテンを閉めてしまう。

その間一度も月美は、振り返らなかった。

おやすみの言葉すか返せなかった龍一は、ただ呆けながら幼馴染が消えた部屋の明かりを眺めていた。

その光も直ぐに消える。

龍一の部屋に、静けさだけが残った。

「俺も寝ようかな……」

そう言い部屋の電気を消すと、ベッドに潜り込む。

幼馴染がプレゼントしてくれた青春の記憶が、龍一の脳裏に鮮明に焼きついていた。

ベットの中で瞼を閉じても消える事無く浮かんで来る。

今晚の宝だ。

良い夢が見れそうだった。

「久々に、自家発電しようかな……」

こうして少年が歩む、新たな人生の一日目が終了した。

登校小話

早朝。

龍一が両親と朝食を取っていると、二階から早足で降りて来た姉の虎子が、何も言わずにリビングを横切り玄関に向う。

母がおはよしの挨拶を掛けたが姉はそれすら無視して家を出て行った

今日は平日だしスーツを着ていたから、出社したのだろう。

姉の様子からして、まだ昨日の事を怒っているようだった。

当然だ。一日で忘れろってのが無理がある。

食事を終えた父が席を立つと、ネクタイを締めながら息子に言った。

「龍一、虎子が帰ったら、もう一度謝っておけ」

ドスの効いた声は、まるで脅しのような響きがあった。

食事の箸を止めた龍一が、俯き加減で「うん……」と答える。

父に言われるまでもなかった。龍一も朝一で姉に再度謝る積りだった。

だが姉の虎子は、避けるように家を出て行ったのである。

龍一の心は、罪悪感をチクチクと感じていた。

やがて強面の父も会社に出社する為に玄関を出て行く。
それを母が家の外まで見送った。

父と母は仲が良い。

結婚して20年が過ぎたが、新婚気取りで腕を組み寄り添っている
シーンをちよくちよく見る。

近所でも評判なぐらいだ。

まさに美女と野獣と言つか、美女と極道である。

「ごちそうさま」

龍一も食事を終えて席を立つ。

そろそろ学校に行く時間だ。一度二階の自室に戻って鞆を取ってか
ら玄関を目指した。

龍一が玄関で靴を履いていると母がいつものよう弁当箱を持ってき
てくれた。

「はい、お弁当」

「ありがとう、かーさん」

龍一が受け取った弁当箱を鞆に入れてみると、更に母が何かを差し
出す。

「龍ちゃん、これで我慢してね……」

いつも微笑みを欠かさない母の顔が、眉毛だけをハの字に歪めていた。

母が差し出した物に龍一が視線を落とすと、それは二つ折りにされたレースのハンカチだった。

三角形に折られたレースのハンカチは、まるで女性物の下着にも見えた。

「か、かーさん……」

龍一が、こまつたような顔で母を見る。だが手は二つ折りのハンカチに伸びていた。ガツシリと鷲掴む。

「かーさん……、ありがとう！」

龍一の眼に涙が滲む。

母のつかさは優しく微笑んでいた。

まさに女神である。

流石は奇跡の39歳である。

三角に折られたレースのハンカチをポケットに捻じ込んだ龍一は、「かーさん、これを励みに今日も頑張るよ！」と心の中で感謝しながら家を出て行く。

憂鬱だった龍一の心が、大分癒された想いだった。

「おはよー、龍ちゃん」

玄関を出ると、家の前で月美が立っていた。明るい挨拶が飛んで来る。

龍一が幼馴染に「おはよー、月美」と挨拶を返すと二人は、駅の方へと並んで歩き出す。

朝、学校に登校する際に二人は、いつも駅前まで一緒に向う。

そこから月美は電車に乗って隣町に在る女子高に向かい、龍一は入れ替わりで電車から降りて来る親友の卓巳と合流して、一緒に歩いて学校へと向うのである。

幼馴染と並んで登校。

通う学校は別々に成ってしまったが、この生活習慣は幼稚園の頃から変わっていない。

龍一が、隣を歩く月美をチラリと見た。

ボーイッシュな幼馴染は、健康的にスレンダーなスタイルで、女子高の可憐な制服を見事に着こなしていた。

短いスカートが揺れるたびに昨日の晩の事を思い出す。

龍一がシマパンの事を思い出してにやついて居ると、いきなり月美が「ねー、龍ちゃん」と話しかけて来た。

ドキリとした龍一が、必死に真顔を作ってから「なに？」と返す。

「流石は叔母さん。凄く龍ちゃんの気持ちを理解しているわね」

「なにが？」

龍一が不思議そうに問うと、月美が龍一のポケットを「これよこれ」と言いながら突っついた。そこにはレースのハンカチが入っている。

「見てたのかよ!？」

「玄関の隙間から見えたよ」

月美が揶揄する目付きで言う。

戸惑いながらも龍一は、玄関が開いていたのだろうかと疑問に思ったが、見られていたことには変わらないと肩を落とす。

また月美に恥ずかしいところを見られてしまったと情けなく成り憚然と沈む。

「龍ちゃん、そんなにパンツが好きなの？」

「好きと言いますか……、なんと言いますか……」

気恥ずかしさに小さくなる龍一に対して月美が、何故か勝ち誇った口調で言う。

「まあ、龍ちゃんも、年頃の男だしね。そう言うのに興味を抱いても仕方ないか」

「うるせよ……」

龍一が、不貞腐れるように口を尖らせる。

それが月美には可愛く見えたのか、今までと違う優しい表情に変わった。

「じゃあさ、また今度、私が見せてあげようか？」

「マジ!？」

龍一が素早い動きで幼馴染の顔を見ると、月美は逆の方を向いて表情を隠してしまう。

しかし、ショートヘアから覗く小さな耳が、真っ赤になっていた。

「た、たまにだったら……、いいよ」

「マジですか!？」

「マ、マジですよ……」

完璧に照れている。

だが、可愛い!

心の中で「よし!」と叫びながら龍一は両手で小さなガッツポーズ

を取っていた。

「その代わり、虎ねくちゃんのパンツなんか、もう取っちゃ駄目なんだからね……」

そつぽを向いたままの月美の言葉は、なんとなく交換条件にも聞こえたが、そんなの龍一には関係なかった。

なんの問題もなく女の子のパンツが拝めるのだ。歓喜な話である。

「わ、わかったよ、月美。もう虎ねくちゃんのパンツには、手を出さない……」

龍一が常識的な事を誓う。

「見るのも駄目なんだからね」

「わかったよ、見ない……」

月美が上目使いで龍一を見ながら言う。

「例え脱衣所に落ちてても、見ちゃ駄目なんだよ」

「うん……、絶対に見ない」

少し考えてから答える龍一。

「洗濯場に乾してあっても見ちゃ駄目なんだぞ」

「思わず目に入った……、とかも駄目？」

「駄目！」

月美の目が怒っている。

釘を刺さず月美の声色には、嫉妬の色が窺えた。

「じゃあ……、どうしてもパンツが見たくなったら……?」

「幼馴染なんだから私に言いなさいよ！ ちよつとだけなら見せてあげるって言うてるでしょ！ 龍くちゃんが見ていいパンツは、私のパンツだけなの！」

「月美、そんなに怒るなよ……」

ここまで興奮して怒る月美も珍しい。

でも、怒る姿も可愛かった。

「じゃあさ、月美」

「なによ？」

月美は少し冷静になってから返事を返した。

「今、ちよつとでいいから、ここでパンツを見せてよ？」

「!?!?」

立ち止まる月美。

龍一のお願いに月美の顔が、下から上へと一瞬で赤くなってしまう。

目が点と成り、頭のとっぺんから湯気を上げて固まっていた。

「駄目か、月美、パンツ!？」

力を込めて訊く龍一。

戸惑う月美。

小動物のような眼差しで懇願する幼馴染の前で月美は、「ち、ちょっと、なに急に言ってるのよ。ここは外なにさ。ちよっとだけならパンツぐらい見せてあげるけど、外は駄目よ。だって他の人に見られるし、幾らなんでもそれは恥ずかしいし。龍ちゃんにパンツ見せるのだって本当は凄く恥ずかしいんだからね。それを、こんなところでパンツを見せるだなんてさ。駄目って訳じゃないけれど、急すぎて心の準備が付かないよ。私だって女の子なんだよ。龍ちゃんにパンツぐらい見られるのは我慢できるけど、他の人にパンツを見られるのは絶対に駄目なんだから。そもそも龍ちゃんは、パンツを見せるのがどれだけ恥ずかしいか分ってるの。私はパンツぐらいって言うてるけど、真に受けないでよね。本当はすっごく恥ずかしいんだからね!」と、キンキンと声をあげながら、あたふたと両手をバタつかせていた。

照れる月美の様子も可愛くいつまでも眺めていたい。

しかし、パンツも見たい。

その為か、ついつい急かす言葉を龍一が言ってしまった。

「月美、お願い、パンツを、パンツを見せてくれ！」

一層力が入っていた。

声も大きくなっている。

拝み倒すように頭を下げる龍一の眼前で、月美が赤面の色を更に濃くしてうるたえる。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと龍くちゃん!？」

「頼む月美、パンツを、パ、ン、ツ、を、見せてくれ!!」

畳み込むように訊く龍一も必死だった。

月美が首を振って辺りを見回せば、数人の歩行者が二人を見ていた。

いつの間にか二人は、駅に近い大通りまで出ていたのだ。

歩行者達の視線が月美に突き刺さる。

好奇心の眼差し、失笑を堪える眼差し、軽蔑の眼差し、様々な視線に月美が気付いた。

離れた場所からこそそと話す他高の女子生徒が、「あのカップル、朝からパンツパンツって馬鹿じゃないの」と話す声が微かに届く。

プルプルと震えだす月美。

「りゅ、龍ちゃん馬鹿 ！！」

叫んだ月美が、拝みながら頭を下げている龍一の後頭部に平手を落としてバシンと叩いた。

そして大声で、「わああああああ」と泣きながら物凄いスピードで走り出す。

あっという間に月美の姿は駅の方へと消えて行った。

一人残された龍一も、頭を上げてから辺りの様子に気付いて赤面した。

逃げるようその場を後にする。

龍一が駅前に着くと、いつものように待ち合わせをしている卓巳が駆け寄って来た。

「おい、龍」

「お、おはよう、卓巳」

卓巳の表情は、険しかった。

「おはようじゃあねえよ、龍。さっき大声上げながら月美ちゃんが走っていたぞ……。何か有ったのか？」

「いや、ちょっとした喧嘩みたいなもんだよ……」

「喧嘩……、大丈夫か？」

「大丈夫だと思う。悪いのはきつと俺だ。夜にでも月美に謝るよ…」

長身の親友は、金髪の髪を掻きながら心配そうな表情で言う。

「そうした方がいいぞ、龍。お前は女にモテない甲斐性無しだからよ、月美ちゃんに愛想を尽かされたら一生結婚すら出来ない童貞野郎で終わっちゃうぞ。だから絶対に謝れよ、絶対だぞ」

念には念を押された。

「親友とは言え、凄い言いようだな。……まあ、当たっているようなもんだが……」

「それはそうと、龍。何していたんだよ、いつもの時間よりもかなり送れて来やがって」

卓巳が携帯電話を取り出し時間を見せる。

「このままじゃあ遅刻だ。走るぞ！」

そう言うと卓巳が走り出した。

何をしていたかを明確に説明しなかった龍一は、何も言い返さずに、走り出した親友の後を無言で追う。

学校には、ぎりぎり間に合ったが、これで今晚中に謝らなければならぬ女性が二人に増えた事になる。

姉の虎子と幼馴染の月美にだ。

気が重くなるが、これも皆、自分の責任だ。

頑張って謝罪しようと思う龍一であった。

遅刻寸前のハプニング

幼馴染に対して、路上で認めも憚らずにパンツを見せてくれと懇願したが為に、親友を道連れに駅から学校までの三キロ程をランニングするはめに成った龍一は、廊下で担任の女教師を追い抜いて教室に飛び込んだ。

龍一と卓巳の仲良しコンビに遅れて教室へと入って来た担任女教師まなみ先生26歳が、やる気の薄い怒りかたで「お前ら、廊下を走っちゃ駄目だぞ」と二人を注意するが、二人は適当に聞き流して自分たちの席に急ぐ。

担任女教師まなみ先生は、サバサバとしたお姉さんタイプの先生である。

いつもジャージ姿でてきぱきと動く彼女は、気の強そうな口調で生徒や他の教師と接し、男ぽい面も多いがやたらと面倒見が良い出来た教師である。

よく見れば薄化粧を欠かさない女らしいところも掛け備えており、人当たりだけでなく容姿も運動神経も申し分なく、男女問わず生徒全般に人気が高い。

だが、独身である。

「ん？」

まなみ先生が教室に入ると、床に何か不自然な物が落ちているのを発見する。

「なんだ、これ？」

短めのポニーテールを揺らしながらまなみ先生が、それを拾い上げた。

それとは、龍一の持ち物であるレースのハンカチだった。

慌てて教室に飛び込んだ時に、思わずポケットから落としてしまった物だ。

「誰だ、教室にパンティー落としたのは？」

三角に折られたレースのハンカチを拾い上げたまなみ先生が、ヒラヒラと振って生徒全員に見せる。

「女子諸君、ちゃんとは履いているか？ 私はちゃんと履いているぞ」

本物のパンツに見えた男子生徒達が双眸を見開き「おお！」と猛りながら凝視するなか、女子生徒達がザワザワとどよめき自分の股間をスカートの上からさすって確認を取る。

女子生徒のAさんが言う。

「まなみ先生。それ、ハンカチですよ……」

「あ、本当だ。私はてっきりパンティーかと思ったよ。つまらん、ハンカチか」

女子生徒達が安堵に胸をなでるなか、男子生徒達はがっかりと落胆して見せる。

「そのハンカチ、さっき政所君が落としましたよ」

龍一が落とすところを見ていたのだろうか、一人の女子生徒が報告する。

その生徒とは、いつも龍一が気を引こうと不順なテレパシーを飛ばしている憧れの女子であった。

隣の列の四つ前に座っている彼女の名前は、しかぬま鹿沼 ひすい翡翠。

龍一が密かに思いを寄せている彼女は、容姿端麗頭脳明晰であるが、運動神経は零に等しいおっとり系である。天然な素振りも多い。

性格は素晴らしく良い子である。ハグしたら一生離れたなくなる程に可愛く、一つ一つの動作が可憐で育ちの良さをフェロモンと一緒に放出しているぐらいであった。

腰まで在る長い黒髪が、とても魅力的で、胸も大きい方である。

正直なところ結婚したい。もちろん将来的な希望である。

しかし、当然ながらライバルは無数である。

鹿沼翡翠は、校内全体の可愛い女子生徒ランキングで一年生の頃からベスト10内にランクインしている。

蓬松高校に通う男子生徒の多くがお墨付きを与えるほどの美少女なのだ。

「なんだ、政所。お前のハンカチか？」

まなみ先生がレースのハンカチを突き出しながら言う。

「男子が持ち歩くようなハンカチじゃないな。お前は、こつこつのが好きなのか？」

まなみ先生も意外だなと言いたげな顔をしていた。

「それは！」

慌てて席を立つた龍一が走ってハンカチを取りに行く。

焦って足が纏れながらも答える。

「母のハンカチを間違えて持ってきたんです！」

手に持ったハンカチを乱暴に奪われたまなみ先生は「そうか、つまらんな」と言うと主席簿を開いて朝の儀式を開始する。
何がつまらないのかは不明であった。

ハンカチをポケットに捻じ込みながら龍一は、恥ずかしそうに自分の席に着いた。

帰り道で鹿沼翡翠と目が合った。彼女は軟らかく微笑んでいたが、龍一は思わず顔を背けてしまう。とても恥ずかしかったのだ。

「よりによって、何でだよ……」

呟きで愚痴る龍一。鹿沼翡翠に見られた事が悔いに成る。

ほんのちょっとした出来事であったが、甘酸っぱい思い出として龍一の記憶に青春として刻まれた。

傷は浅い。

忘れよう。

この程度のハプニングならば皆もが直ぐに忘れてくれるだろうと思っただ。

しかし世間は許さない。

今後このネタは、しばらく尾を引く事に成るのであった。

政所龍一が母のパンティーをハンカチ代わりに使っていると、謝った噂が学年内に広まるので、僅か一日と掛からなかったのである。

昼休みの噂話

昼休みの事である。

龍一が卓巳と机を向かい合わせて弁当を食べていると、隣のクラスの男子生徒が教室に入ってきて、二人に話かけてくる。

「な、な、龍」

彼の名前は鶴岡つるおが 又吉またよし。

お調子者で、誰にでも賑やかな口調で話しかける軽い男である。

髪を少し茶色く染めているが、本人は卓巳のように、もっと金髪に染めたいらしい。

しかし、その願いが叶わない事を、龍一と卓巳は知っていた。

又吉の家柄は古くから名門で有名な茶道の流派らしい。本来ならば茶髪すら許されない程に厳しい家柄なのだ。

だが、堅苦しい家に生まれ育ったわりには、又吉の性格はなんとも柔軟である。人当たりは軽すぎる程に馴れ馴れしい。

そんな又吉も家に帰れば、厳格な家族やセレブな客人に囲まれ、猫を被りながらお茶をたてている。

想像しただけで笑ってしまいそんな光景である。

「な、な、知っているか、ミスターオカルト」

「ん、何、又吉？」

弁当を食べ終えた龍一が、片付けをしながら返事を返す。

一緒に食事を取っていた卓巳も、もう少しで食べ終わりそうだ。

「ミスターオカルト、面白い噂話を仕入れたぜ。どうだい買わないか？」

龍一は又吉に、しばしばミスターオカルトと呼ばれる事があるが、あまり気にしていない。

又吉が、こう呼びながら近寄ってくる際は、大概がオカルト話をしたい時である。

買わないかと振ってくるが、実際に売り買いを行った事は無い。

「どんな噂話だ？ この前みたいなくだらない都市伝説は厭きたからな」

この前の噂話とは、こうであった。

町に化け物じみた怪人が現れ悪さを働くと、バイクに乗った仮面の男が登場して退治すると言った噂話である。

この都市伝説は、昭和47年ぐらいから噂されるようになった話で、最近では都市伝説の一つとしてインターネット上でも多く語られている。

怪人は、人間を外れた外見をしており、人間の遺伝子に、まったく別の生き物を足したような化け物で、中には機械と融合した者も居

ると云われている。

そのような怪人が、何処からともなく表れて、人を浚ったり殺したりするらしい。

時には世界征服を目論み、秘密結社として影で暗躍しているとも噂されている。

オカルトに興味を持っている人物ならば一度くらいは聞いたことがある都市伝説だが、逸脱した内容のせいで信憑性は低い。

「いやいや、今回の話は、もっと身近な話だぜ」

又吉はオカルト話が好きな訳ではない。基本的に情報が好きなのだ。いろいろな人といろいろな情報を交換して、更なる情報を手に入れる。そうやって人間関係を広げて行きながら知識を収集するのが好きなのだ。

生まれ付いての情報屋みたいな男である。

そして又吉が話をわざわざ龍一のところを持つて来る理由は、自分が持ち込むオカルト話の信憑性を確かめ、その上でうんちくを学びたいからである。

ただの噂話も、それなりの知識が有る人物の意見を取り入れれば、一段と面白い話になるからだ。

又吉の中で、自分が知る人物では政所龍一が一番のオカルト研究家なのだ。

龍一の意見を取り入れたオカルト話ならば、この後に同じ話を聞かせる相手の反応が、大きく違ってくる事を又吉は知っていた。

良い情報で、内容が詳細な物ならば、相手の受けが良いのだ。

龍一も又吉が持ってくる噂話には、感謝している。

自分は女の子と話のが苦手である。身内や月美以外の女の子と話すと、直ぐにどもってしまふ。

だから女の子が好むような噂話や都市伝説の類は、いつも又吉が運んでくるのである。

彼の持ち込むスピードは、時にネットよりも早い時があるからだ。

「身近ってなんだ？」

又吉に訊いたのは、弁当の蓋を閉めたばかりの卓巳だった。

それに又吉が答える。

「パンドラ爺婆の噂だよ」

「パンドラ……」

又吉の話に龍一は、先日自分が出会った老婆の顔を思い出す。

自分に超能力をプレゼントしてくれた老人だが、未だどのような超能力が備わったかは不明である。

「ハンドラじじいば？ パンドラって言ったら、108の災いが入っていたって言うパンドラの箱の……あれだろ？」

卓巳の質問に、今度は龍一が答えた。

「ギリシヤ神話だよ。」

プロメテウスが天界から火を盗み、人間に与えてしまった事を怒ったゼウスが、他の神々に命じて『女性』を作らせた。肉体を泥から作られ、男性を苦悩に追い込む我が儘な魅力と、獣のような恥知らずな心を与えられた女性。それがパンドラだよ」

「ほうほう」

「パンドラって泥なんかい……」

卓巳と又吉が、淡々と語る龍一のうんちくに耳を傾ける。

「そしてゼウスはパンドラに一つの壺を持たせると、プロメテウスに彼女を贈り物だとしてプレゼントするんだ」

「壺？ 箱じゃないのかよ」

又吉が訊くが、龍一は首を横に振ってから答える。

「今ではパンドラの箱として有名だけど、この話が一般に広まる前の古い書物では、壺と書かれている事が多かったんだ。それが世間に広まる途中で、箱としての方が有名的に広まったんだよ。実際は、箱なのか壺なのか、どっちが正しいかは僕にも解らないけどね」

今度は卓巳が言う。

「で、確か、その道中でパンドラちゃんか、好奇心に負けて箱か壺だかの蓋を開けて、世界に108種の災いが広まるんだよな」

「大まかには、そうだけだね。もっと細かく言うならば、プロメテウスはゼウスの贈り物を拒んだんだけど、弟のエピメテウスがパンドラの美しさに引かれて結婚してしまうんだ。その後、パンドラが蓋を開けてしまう。彼女は、災いを世界にばらまく為だけに生み出された女性なんだ」

「パンドラちゃんって、既婚者だったのか……」

そこまで説明した後に龍一が、「それでパンドラ爺婆ってなんだよ？」と、問う。

「なんでも一年前ぐらいから、急速に浮上し始めた噂話で、まだネット上にも揚がっていない話なんだけどな」

又吉の顔は、無邪気に笑っていた。

「この素度夢町と、隣の後母等町に出没する怪人らしいんだ」

「怪人……」

怪人と云われ龍一が、眉間に皺を寄せた。

確かに超能力をプレゼントしてくれると言う点では、怪人かもしれないが、自分が行き当たった老婆は、水晶を前にした占い師風だった。怪人と呼ぶほどに奇怪でもなかったと思う。

それに爺婆って事は、爺さんと婆さんの二人と言つ事だろう。
それも龍一の体験と異なる。
自分の場合は、老婆しか居なかった。

「なんでもよ、そのパンドラ爺婆ってのに出会つと、超能力が貰えるらしい」

そこは、龍一の体験と類似している。

ただ、本当に自分に超能力が備わつたかは不明だが……。

「それで、そのパンドラ爺婆ってのは、二人居るのか？」

卓巳が問う。

龍一は、ナイスと思う。そこも知りたい疑問の一つだった。

「ああ、二人居るらしい。爺の方が、後母等町に出没するらしく、婆がこの素度夢町に現れるらしいんだ」

「じゃあ、婆は、この町に居るんだな。何処に行けば、会えるんだ？」

卓巳の質問に、それは分らない、と又吉が答えた。

俯いて考え込む龍一。

やはり龍一の出会つた老婆は、その婆の方だ。

この噂は、本物だ。

「龍、聞いたか。超能力が貰えるんだってよ。本当ならスゲーな。俺等も貰いに行くか？」

冗談混じりに言う卓巳は、話の根本を信じていない様子だった。

もともと卓巳は、超能力や幽霊などの類は信じててない。しかし、否定もしていない。オカルト現象が、存在しようがしまいが関係ないと考えていた。

だからオカルト好きの龍一とも親友関係が築けている。

「でも、この話には、まだ後があるんだよ」

語る又吉の顔に、怪しげな影が掛かり不気味な口調に変わる。

「なんでもよ、パンドラ爺婆に出会って超能力が貰えるけど、その代わりに人格まだ変貌するらしいぜ……」

「人格が変わってなんだよ？」

質問を反す卓巳の横で、龍一の顔が曇る。

龍一の脳裏に、新しい趣味と言う老婆の台詞が流れた後に、ドラゴンが運んで来たパンツの雨が思い浮かんだ。

そして更に又吉が怪しさを深めながら言う。

「パンドラ爺婆に、超能力を貰った人間は、その後、殺人鬼に変貌するらしいぜ」

殺人鬼！

龍一の背筋が一瞬伸びた。

「殺人鬼に成るって、どう言う事だよ？」

「ほら、三ヶ月ぐらい前に、C組みの江田島って奴が、暴力事件で退学させられただろ」

覚えている。確か、自分の父親をバットで殴りつけて病院送りにした事件だ。

ニュースにも成った。

バットで殴られた父親は、一命を取り留めたらしいが、死んでも可笑しくない重症だったらしい。

「あいつが事件を起こす数日前に、変な婆に出会ったとか言ってたらしい。その話の裏は、クラスメートから俺自身が取ってるから間違いない」

「マジか！？」

「それだけじゃないぜ。一年の女の子が、一ヶ月前から失踪しているんだが、彼女も後母等町で変な爺に出会ったて、周辺に語っていたらしい。」

確認こそ取れていないが、別の学校でも、似たような話が上がっているとか……」

最後に間を置いた又吉が、神妙な顔を作りながら考え込んでいる龍

「一に、「どう思う、ミスターオカルトは？」と訊いた。

少し考えてから龍一が答えた。

「今のところ情報が少なすぎるし、良くある厨二臭い話だ。

「C組の男子生徒の暴力事件や、一年の女の子が失踪した事件とも、因果関係がなさすぎる。失踪と暴力事件では、一緒に出来ないし、まだ誰も死んでないんだろう。殺人鬼って言うてもな……」

自分が殺人鬼に成ってしまうのかと、不安が過ぎった。

だから、否定気味の意見に成ってしまう。

「現段階では詳細の意見は述べられないけれど……」

「けど？」

「身近で、この町と隣町で起きている事件ならば、まだ調べようがあるかもしれないね。手の届く範囲内の事件、そこに興味が持てるよ」

興味どころの話ではない。真相を見極めたい。

「なるほど……」

今度は又吉が考え込む。

龍一の意見は、遠回しだが自分に調査しろと言っているようなものだったからだ。

「分かった、もうちょっと情報が集まったら出直すよ」

そう言って踵を返そうとした又吉を龍一が、「ちょっと待った」と呼び止める。

「調べる気があるなら、調査内容をリクエストしていいかな？」

カッと、又吉の顔が明るくなる。

「何だい？」

「パンドラ爺婆も気に成るが、その老人達と出会った生き証人を探してくれ。あと本当に超能力を貰えるなら、どんな超能力を貰えたかだ」

「龍く、否、ミスターオカルト。僕を舐めているのかい。そんなの君に言われなくても心得ているよ。僕の夢は茶道の家元を継ぐ事じゃない、探偵小説などに出てくる情報屋に成る事だ。夢はハードボイルドの脇役だぜ。任せておきな」

「もっといい夢を持つぜ……」

ミュージシャンを夢見る卓巳が、心配そうに又吉を見た。

だが、ご機嫌で又吉は踵を返すと教室を出て行った。

新たな情報を求めにだ。

しかし、誰も気付いていなかった。

クラスメートもだ。

三人が、オカルトチックな会話を繰り広げている間、龍一の席の隣の列、四つ前の席で昼食を終えた鹿沼翡翠が、読書をするふりをして、三人の会話を熱心に盗み聞きしていた事を。

「あら、翡翠。読んでる本が逆だよ……。あんたそれで本が読めるの？」

逆さまに持った本を読んでいる翡翠に気付いたクラスメートが訊くと「あ、本当だ！」と惚けてみせる。

謎の二人組み

蓬松高校、校門側。

一台の黒いバンが停車していた。

車内の運転席と助手席に、人影が見える。

「なんで俺等が、張り込みみたいな事をせにやあならんねんだ〜」

運転席のハンドルに顎を乗せながら男が言った。

「仕方ないだろ。暇なのは私達ぐらいしか居ないんだからさ」

頭の後ろで腕を組みながら、シートにふんずりかえる女が答えた。

やる気の無い態度で話す男女の視線は、フロントガラス越しに、校門を潜り下校して行く生徒たちを見ていた。

一人一人の顔をチェックしている。誰かを探している様子だった。

男女共に、二十歳ぐらいだろうか。

男の方は、だぶだぶとした白いジャージを着た茶髪で、極道でもなく、堅気でもない風貌をしていた。

女の方も、同じぐらいにケバイ容姿をしていた。化粧も濃い。スナックのホステスのようだ。

二人は、中途半端なチンピラのカップルに窺えた。

「でも、探すつたてよ、解っているのがアップの顔写真だけだろ。それに本当に、この学校の関係者かも解らないしよ」

そう言いながら男は携帯に映る少年の顔を見た。

「年頃からして生徒と予想できるし、桜ちゃんの念写は信用できるわ。」

それとも夏子さんに代わって、写真だけを頼りに家の方を探して回る？」

「いや……、そっちの方が、かつたるそうだから御免蒙るわ……」

「でしょ。じゃあここで、生徒を見張ってましようよ。居なかったら居ないでいいんだしさ。見つからなかったって三日月堂に報告すればさ」

「だな」

男がチラリと女を見てから訊く。

「ところで、今も入れているの？」

男の質問に女は長い髪をかき上げてから答えた。

「当然よ。入れてないと寂しいもの」

女の眼差しは、怪しくも魅力的に潤んでいた。

「この前さ、通販で新製品を買ったのよ。今度はリモコン付で、連続6時間使用可能なのよ。防音もしっかりしているからモーター音が外に漏れ難いのよね。」
だから野外でもバッチリなのよー」

女の顔は、ピンク色に火照っていた。

「へ、そうなんだ」

男は詰まらなそうに応えると、視線を生徒たちが潜る校門に戻す。

その時である。

丁度、龍一が卓巳と一緒に下校して行った。

「ビンゴ！ 見つけたぜ！」

「わお、本当だ！ 張り込み初日で見つけられるなんて私達ってばラッキー」

男が車のキーを回してエンジンを掛ける。

尾行の開始である。

下校時のトラブル

いつものように卓巳と二人で下校した龍一は、駅前で親友と別れてから暫く街中をうろついていた。

素度夢駅を中心に、ただ歩き回る。

目的は一つ。

昨日の占い老婆を探してであった。

「今日は、居ないのかな……」

老婆と出会った本屋前を中心に、何度も駅周辺を回っては、また同じスタート地点に戻って来るを繰り返していた。

しかしながら老婆どころか占い師の姿すら見当たらなかった。

占い師が街角に姿を現すのは基本的に夜が多い。

路上の占い師の多くが、酒が入ったサラリーマンやOLを相手にした商売を行なっているからだ。

そもそも龍一が老婆と出会った時間帯に、占い師がテーブルを出している事態が早過ぎたのだろう。

だが、そんな明るい時間帯に占い師の老婆が居たのは事実である。

龍一が上を見上げてビルの頭越しに空を眺める。

空が橙色から黒に色を変え始めていた。

「そろそろ帰ろうかな……」

結局のところ老婆は見つからなかった。

ポケットから携帯電話を取り出した龍一が、時間を確かめながら歩く。

もう六時半を過ぎている。

ドンツッ！

「あ！？ すみません」

携帯電話の画面を見ながら歩いてきた為、前方から歩いてきた人物と肩がぶつかり合ってしまった。

龍一は、相手の顔を確認するよりも先に謝罪を口に出す。

しかし。

「いててて。にーちゃん、人にぶつかつといてよお、謝っただけで済むと思ってるのかあ、ええ、あ、よお？」

露骨に因縁を掛けてくる男は、とてつもなく頭が悪そうな喋り方だった。

黒い革ジャン。黒い革のパンツ。髪型は、ポマードで固められたり

ーゼント。金のネックレスに、指には髑髏のリングが幾つも嵌められていた。

時代錯誤なロカビリー風の不良少年。

面容も極上の悪さを備えていた。

「す、すみません……」

謝罪程度で済まないと述べたロカビリー風の不良に対して、再び謝罪を述べる。

二度目の謝罪を口に出しながら龍一の視線が、革ジャンの胸元に描かれた刺繍に移った。

蜘蛛の巣に逆さで映る大蜘蛛の刺繍。

龍一の脳裏に、幾つかのキーワードが並んだ。

大蜘蛛の刺繍。

上下黒の革ジャン。

ロカビリー風の不良。

この三つから出るイコールの回答は、一つだった。

この素度夢町を縄張りにする少年不良集団。

ジャイアントスパイダーズ。

悪い噂が絶えないチーマー。暴力少年グループである。

自分が出した回答に、表情を強張らせる龍一。

一方の不良少年は、怒りに表情を鋭くしていた。

この町で、普通の学生生活を過ごしている少年少女達ならば、出来るだけ関わり合いたくない集団である。

その内の一人と肩をぶつけてしまったのだ。

己の不注意を、呪わずにはいられなかった。

「なあ、にーちゃんよ。このおとしまえ、どう付けてくれるんだあ？ 肩が砕けたぞ、まちがいねえぞあ」

わざとではない。不慮の事故。悪気はなかった。その程度の言い訳が通用する相手ではない。

常識的なモラルが通じない、ろくでなしである。

そのろくでなしが、表情を険しくしながら龍一の肩に腕を廻して来た。砕けた筈の腕でだ。

「ちょっとここでだ何だなあ。向こうで話そうや、なあ」

そう言いながら足を裏路地の方に進めて行く。龍一は、強制的に連れて行かれる形と成る。

これはヤバイと神妙に悩む龍一は、カツアゲされる自分を想像していた。

暴力は嫌いだ。

嫌いな理由は、暴力が苦手だからだ。

振るうのも苦手だが、何よりも振るわれる方が苦手である。

不良が怖い訳ではない。

家に帰ればヤクザ顔負けの顔面を有した父がいる。だから強面には慣れていた。

それでも暴力は別である。

痛みへの恐怖は、動物としての本能が嫌うのだ。

そして今肩を組むロカビリー風の不良は、龍一が嫌っている暴力を好む集団の一員である。

平気で人を殴り、憤怒に任せて喧嘩を行なう。

だから苦手なのである。

「なあ、いくら持つてる？」

既に龍一たちは、人気の無い細い路地にたっていた。ビルとビルの隙間である。

「金だよ、かゝねえ。財布出せよ、さゝいゝふう」

龍一の耳元で不良少年が、囁くように強請る。

「慰謝料だよ。こつちとらあゝ、肩が碎けてんだ。慰謝料をくれって言っただよあゝ。とつとと出せや、ゴラア!？」

他者への恐喝。列記とした犯罪行為だが、不良少年には罪の意識が無い様子だった。

龍一の肩に廻した腕に力が入り、ユサユサと揺さぶって強請ってくる。

龍一の脳裏に幾つかの選択しが並んだ。

選択肢一。大声を出して助け呼ぶ。

遅い。もう遅すぎる。助けを呼ぶなら、こんな裏路地に連れられて来る前に騒ぐべきだった。

却下である。

選択肢二。尚も謝って許しをこつ。

駄目だろう。ここまで来て許してくれるなら、とつくに許していただろう。

絶対に殴られるだろう。

却下である。

選択肢三。反撃を行なう。

駄目だ。暴力は苦手だ。痛いのは嫌いだ。絶対に勝てない。

却下だ。

自分が不良少年に暴力で勝てるわけがない。

だが、なんだろう。

この人の足元。何かが可笑しい。違和感を。

「なあ、金だせよ。それでよく、勘弁してやるから。なあ、観念しろやあ」

今見えている状況。その違和感を打ち消すように動けば、危機が乗り越えられる。

そう、感じられる。

これは違和感……？

否、直感なのか？

「おい、聞いてんのか？ にーちゃん、つよ！」

体を寄せ合う状態で、横に頭を振るった不良少年が頭突きを打ち込んで来た。

龍一の頭に振動が響く。

痛み。

危険。

排除。

その言葉が龍一の脳裏で駆け巡った。その次の瞬間には、龍一の体が動いていた。

振り上げた片足が力強く不良少年の片足を踏みつけた。

「ぎゃっ！」

不良少年は、予想外の反撃に悲鳴を聞いて顔を顰める。

踏まれたのは足の小指だった。

ブーツの上からだだったが、まるでハンマーで潰されたような激痛が、爪先から脳天目掛けて駆け上っていた。

また、違和感に気付く龍一。再び感じ取った違和感は、不良少年の顎先だった。

「そこを打てばいいのかな？」

口走ると同時に手が出ていた。

左のロングフック。

大きく振られた龍一の拳が、遠心力を孕み不良少年の顎先を横から強打した。

拳打に不良少年の頭部が細かく揺れた。

視界に幾つもの白い星が飛び交う。

頭蓋骨の中で脳味噌が、プリンのようにプルプルと激しく揺れると不良少年の意識が何処か遠くに旅立つ。

脳震盪。

ダラリと口を開き、半開きの瞼から左右別々の方向を見る瞳が覗いていた。

先程までの血気盛んな表情が、完璧に失われていた。

内股で膝から崩れ落ちる不良少年は、ビルの壁に寄り掛かるような体制で止まり動かなくなってしまう。

「こ、これは……、何？」

不良少年を殴り倒した龍一が、まだ暴力の余韻が残る己の拳を凝視していた。

「俺が……、倒したのか？」

気を失った不良少年を見下ろす。

「僕が喧嘩で勝った……」

これが自分にプレゼントされた超能力の一端だと龍一が気付くのは、もう少し時間が掛かるのであった。

龍一は、この場を逃げるように後にした。

それぞれの勘違い

自宅に帰った龍一は、家族団らんの食事を終えると、少し温めの風呂に漬かりながら考え込んでいた。

姉の機嫌は、直っていなかった。

龍一が不良少年を殴り倒して帰宅した直後、姉の虎子と玄関で出くわしたのだ。姉も会社から帰宅した直後だったようだ。

龍一が暗い顔で謝罪を述べたが、聞いてもくれなかった。ヒールを脱ぐとすぐさま二階の自室に駆け上がっていつてしまう。

食事の際も、家族全員の前で再び謝罪を述べたが無視された。

父や母は、無視を決め込む姉の虎子に対して、龍一に味方するような言葉を掛けてくれていたが、やはり姉の怒りが収まる素振りはなかった。

姉の虎子は、食事を終えると何も言わずに二階の自室に帰ってしまう。そして部屋に閉じ籠りそれっきりだ。

食卓を囲む三人に、ただただ気まずい空気だけが残ってしまう。

食後風呂に入った龍一は、湯煙が溜まる天井を眺めながら、当分のような状況が続きそうだと予感を強めていた。

「虎ねーちゃんの機嫌が直るまで、少し待とうかな……」

下唇が湯に漬かる寸前まで体を沈めた龍一が、ぼつりと呟いた。

湯船は暖かいが、心が若干寂しく寒さを感じる。

「それとも、顔を合わせる度に謝ろうか……」

自分で言ってから龍一は、後の意見の方が良いだろうと思う。その方が、誠意有る謝罪ではないかと考えた。

「虎ねーちゃんに、嫌われっぱなしは嫌だよな……」

昔の事を思い出す。

小さな頃だ。

姉とは二つ歳が離れていた。それでも小学生ぐらいまでは、姉や幼馴染の月美とでよく遊んだものだった。

女の子がするようなママゴトやゴム飛びなどもやったが、どちらかといえば男の子がやるような遊びが多かったと思う。

幼い頃からボーイッシュな月美は勿論ながら、男勝りな気立ての姉であったから、やんちゃな遊びが多かったと思う。

鬼ごっこや隠れんぼ、野球やサッカー、木登りもよくやった。隣の町内の悪ガキ達と、喧嘩もやった。

子供同士の喧嘩の思い出。

姉は度胸が据わっていたし、月美は運動神経が異常に良かった。

だから女の子にも関わらず男の子と対等に喧嘩が出来た。

度胸も運動神経も乏しい龍一は、それを後ろからいつも見ているだけだった。勿論、応援はした。

そんな自分が情けないと思うことより、二人の強さに憧れたものがある。

姉の虎子は、弟の龍一に対して、いつも優しく、暖かく、時には意地悪だった事もあるが、弟思いの素晴らしい姉だったと思う。

龍一は、そんな虎子を慕っていた。

正確に言えば、姉に恋をしていたのかもしれない。

幼馴染の月美よりも、血の繋がった姉の虎子に、恋していたのかもしれない。

勘違いかもしれないが、初恋だったのかもしれない。

でも、中学二年の頃、姉はグレた。

見事にグレた。

制服も乱れ、髪を金髪に染め、化粧も濃くなり、ポケットの中にはいつもメリケンサックが隠されて有った。

噂で聞いたが、素度夢町で一番強いスケ番だつとか。

しかし、姉も女性である。

乙女であった。

高校生になった姉は、クラスの優等生に恋心を抱く。以来、急に不良を卒業して真面目な女性に戻った。ちょっと強気な女性にだ。

周囲の驚きを余所に、二人はカップルになった。

だが、半年もせずに二人は別れる。

姉が振られたのだ。

噂でしかないが、姉を振った男は、現在のところ、ドラム缶にコンクリート詰めで海に沈んでいるとか、いないとか……。

姉は、真面目を装っていたが、影でスケ番を続けていたのだ。

激昂した姉に始末されたとか、姉を慕う不良たちに始末されたとか、色々な噂が流れたが、真相は不明である。

その後も姉は、真面目な仮面を被ったまま高校生活を送り続け、影ではスケ番としての顔役を務め続けた。

しかし失恋がそうさせたのだろうか、男性を避ける傾向が見られ始める。

龍一とも会話が少なくなった。

彼女の方が弟を避けている様子だった。

それもここ最近では、随分と直った感じで、昔の様に仲良く会話をするように成っていたのだが……。

龍一が、姉のパンティーを鑑賞する現場を見られて、ぶり返してしまっている。

「そうだ……、もう一人怒っている奴がいたっけな……」

幼馴染の月美である。

「まあ、月美はいいか。あれは、いつも気まぐれだ。謝れば直ぐ許してくれるだろう」

甘い考えであるが、本当である。月美は、そのような女の子である。

湯から左手を出すと龍一は、力を込めて拳を握り締める。

今度は、今日行なった喧嘩の事を思い出す。

「あれは……、あれが、超能力なのか？」

人気の無い路地に連れ込まれて、カツアゲされた。

その相手に感じた違和感。

相手の爪先、小指に落とした踵蹴り。

一撃で相手をKOさせた、左のフック。

そのどちらも、自分で模索した攻撃と呼ぶよりも、何かに導かれるように出した答えを、その者に操られて繰り出したような感覚だった。

何よりも、度胸も運動神経も少ない龍一に、不良少年を殴り倒せる訳がない。

今まで喧嘩で勝ったどころか、ろくな暴力すら振るったことがないのだ。

それが、あの時　　。

攻撃ポイント、相手の隙、弱点を感じ取り、更に一番有効的な最大限に威力を発揮する攻撃方法をインストールされた感覚だった。

そして体が勝手に動いた。

結果、不自然なまでの勝利。

それが、龍一が感じ取ったすべてである。

「俺が、あの婆さんから貰った超能力って……、これなのか」

龍一の推測が正しければ、己に授かった能力は、相手の弱点を自動的に知り、その対処法を実行する完全なる戦闘用のスキルだ。

「嬉しく……、無いな……」

今更、喧嘩が強くて何になる。

幼い頃は自分も強くありたかったが、今は違う。

超能力に憧れていたが、強くなりたいからではない。

ヒーローに、正義の味方に、最強の戦士になりたいわけではなかった。

山男が山に登る理由は、一つだ。

そこに、山があるから。

龍一が、超能力を欲しがった理由は、憧れた理由は、それと類似する。

そこに、超能力があるからだ。

だから得た超能力で、人助けに励む気もなければ、悪用して利益を得ようとも考えていなかった。

ただただ、研究したかったのだ。

「ふう〜、のぼせそう……。そろそろ上がろうか」

風呂を上がった龍一は、寝巻きに着替えてから脱衣所を出て行く。

まだ湯気を上げる髪をバスタオルで拭きながら廊下を歩いていると、父の源治がリビングから出てくる。

片手には、本屋の紙袋を持っていた。龍一がよく通っている駅前の

本屋、三日月堂の紙袋だった。

「龍一、ちよつといいか？」

「なに、父さん？」

父は廊下まで出てくると、手に持った紙袋を龍一の方に差し出した。中には何かの雑誌が入っている様子であった。

本屋にちよくちよく通う龍一には、紙袋のサイズと厚みで、それが何となく悟れた。

「これをお前の為に買って来た、お父さんからのプレゼントだ」

「プレゼント？」

珍しい話である。

「母さんには、内緒だぞ」

父は真剣な表情で言った。

「私がお前ぐらいの頃には、同じような思い出がある。若いとは、そのような事柄との格闘ともいえよう」

「格闘？」

父が差し出した紙袋を受け取りながら龍一は、首を傾げた。

格闘と述べた父の言葉から、袋の中の本は、何かの格闘技雑誌なの

かと考えた。

そのまま紙袋のセロハンを剥がして中の本を覗き見ようと口を広げる。

「龍一、お前の趣味がどうであれ男である以上は当然の事だ。だがな、実の姉は駄目だ」

何を言っている、父よ、と心で思う龍一。

「お前の好みが年上の女性でも、我慢が肝心だ。それで暫くは我慢しなさい。その我慢に耐えられないなら、早く彼女を作りなさい」

父の言葉を聞きながら紙袋から雑誌を取り出した。

「え!?!」

エロ本だった。

タイトルは『ときどきおねーさんの誘惑白書』である。

表紙には、おねーさん系の女性が卑猥なポーズで映っていた。

踵を返す父が、渋く呟く。

「隣の月美ちゃんが、虎子のようにエロイタイプの娘さんだったら、私も苦惱せずにすんだらうにな……」

父の源治は、母のつかさが待つリビングに帰っていた。

「父さん……、貴方は勘違いしています。何かを勘違いしています……」

今度は龍一が呟くが、それは父の耳には届かない。

溜め息をついた龍一が、階段を上って自室を目指す。

それでも父のプレゼントを、ちゃんと部屋へと持ち帰るのであった。部屋に帰りベットに寝そべる龍一は、早速父のプレゼントを鑑賞し始める。

「おお、これは……、なんとも……」

おねーさん方の全裸ヌード写真には、大きな興味が湧かない。

それでも数あるページの中には、全裸じゃないヌード写真も多々あった。

なんともセクシーなランジェリーを身に纏った女性たち。その下着が龍一の扇情を煽る。

たまらない！

そこには天国が広がっていた。

刹那。

ガラガラガラ！

「えっ!？」

突然、窓が開いた。

いや、開けられた。

隣に住む、幼馴染の月美である。

「り、龍ちゃん……。叔父さんから何貰って読んできるかと思ったら、え、え、えっちな本だなんて……」

呆然とした表情で述べる月美は、随分と幻滅感溢れる声色で言った。

「いやいやい、これは違うんだよ!」

焦りながらも言い訳に戸惑う龍一は、咄嗟に見ていたページを広げ、たまたま月美の方に突き出した。

両手で広げられたエロ本のページには、黒いスケスケパンティーを履いた、なんとも妖艶なおねーさんが、下品なポーズを取っていた。それを見せられた月美は、顔面を真っ赤にさせながら大きな声を出す。

「龍ちゃんは、そういうのが好みなの!？」

「好みって訳じゃないよ、嫌いじゃないけど!」

「やっぱりそうなんだ……」

一步引いてから顔を青ざめる月美は、全身を硬直させながら震わせていた。

「勘違いするなよ、月美。今お前、勘違いしようとしているだろ！」

「勘違いなんかしないわよ、私だって頑張れるもん！」

「えっ………？」

何を頑張る積りだろうか、思わずキョトンとしてしまう龍一を余所に、興奮した月美は屋根の上を駆けて自分の部屋に飛び込んで行った。窓を乱暴に閉めて、カーテンを素早く閉める。

「間違いなく、月美は大きな勘違いをしているな………」

龍一の言う通りだろう。

しかし龍一の胸に飛来した思いは、不安よりも期待であった。

勘違いした月美なら、きっと凄い事を仕出してくれるだろうと期待が出来る。

ノックの後に母が部屋に入ってきた。

「龍ちゃん、月美ちゃんの大声が聞こえて来たけど、どうかしたの？」

龍一は父からのプレゼントを咄嗟に布団の中へと隠した。

「な、なんでもないよ。心配ないからさ……」

「そ、そうなの。あんまり月美ちゃんと喧嘩しちゃ駄目よ」

そう言うと母のつかさは、ドアを閉めて一階に降りて行く。

父との約束は守れた。母には秘密に出来た。

だが、何故に月美の時は、咄嗟にエロ本を隠せなかったのだろうか
と悔いた。

自分が得た超能力は、日常生活でのハプニングに対応して、答えを
出し、実行する能力では無いようだ。

「やっぱり、喧嘩だけで発動するのかな……」

ベットに寝そべった龍一は、そんな事を考えながら、再び父のプレ
ゼントを開いて鑑賞する。

とりあえず自家発電に取り組み生暖かい汗を流すのであった。

二夜連続のチャレンジだったが、若さが勝る。

こうして少年の一日が過ぎ去って行く。

黒い大蜘蛛達

龍一がジャイアントスパイダーズの一員を殴り倒した晩の話である。

「今、何時だべえ？」

実際の時計の針は九時を少し過ぎたぐらいを指していたが、うんこ座りで屈む不良少年が見上げた埃まみれの時計は、十二時三十四分四十六秒を指したところで止まっていた。壊れている。

ここは素度夢町の外れに在る廃工場であった。

広い工場内は、やたらと埃臭い。窓ガラスは薄汚れ蟬が走っているか、無残に割れているかのどちらかである。

屋根も何箇所かトタンが剥がれて夜空の星が窺えた。

その廃工場に、何処からか持ち込んだ古いソファースセットを並べて寛いでいる集団が居た。

柄の悪い一団である。

人数にして二十人は居るだろうか。

全員が身形を黒い革ジャンとパンツ姿に統一している。背中には、大きな蜘蛛が刺繍されていた。

「今、九時ちよつと過ぎぐらいかな？」

答える男は自分の手首を見ていたが、腕時計を付けていない。

「時計してねーじゃん。なんで解るん!？」

「腕毛の伸び具合で解るんよ」

「嘘付け!」

「ほれ」

別の男が携帯電話で時刻を見せてくれた。

「九時一分……。当たてる」

「だろー」

腕毛男が満面の笑みを浮かべる。

頭の悪そうな口調で雑談に花を咲かせる不良少年達。だが、全員が強面。

その中でもソファースセットに座る三人は、更に強面で各違いのオーラを醸し出していた。

ソファースセットから溢れた面々は、錆び付いたドラム缶や木箱に腰掛け、更に座る場所のない小者連中は、うんこ座りでソファースセットを囲んでいた。

ソファースセットに座るのは、凶悪凶暴で名高いジャイアントスパイダーズの幹部である。

そんな廃工場内で、同じ革ジャン姿でありながら、ひとり埃が溜まるコンクリートの床に、正座をさせられている男が居た。

夕方、龍一にKOさせられたリーゼントの男である。名前は高田。

龍一に殴られ出来たのだろう、顎先が紫に変色している。

ソファーに座るオールバックに眉無しの方が、首だけを横に向けながら、正座のリーゼントに声を掛ける。

なんとも忌々しい喋り方であった。

「なあ、安田。てめ、何やってんだ、え」

オールバックの男が凄んで言うと、ソファーの後ろからスキンヘッドの男が耳打ちする。

「あいつ、安田ちゃいます。高田です……」

少し間を置いて。

「なあ、高田。てめ、何やってんだ、え」

オールバックが何事も無かったように言い直すが、それについて誰もツツコミを入れなかった。

リーゼント高田は、正座の姿勢で俯いたまま「すみません……」と、弱々しく答える。

今度は別のソファーに腰掛けていたサングラスに豹柄のウールハッ

トを被った男が訊く。

「駅前で喧嘩して、負けたって。どこのどいつにだ？」

「制服が、蓬松のものでした……」

「蓬松高。なんであんなヘタレ高の奴に負ける？」

「そ、それが、不意を突かれまして……」

オールバックが言う。

「喧嘩だ。不意打ちも糞もねえよ。言い訳にならんわな」

一番大きなソファーに一人で腰掛ける大柄の男は、だまつたまま三人の話を聞いていた。

両腕で両膝に頬杖を付いていたが、それでも体がかなり大きいのが解る。しかも筋肉質。胸は巨乳を押しつぶしたように分厚い。

その剛力を生み出しそうな筋肉を、黒い革ジャンに無理矢理閉じ込めていた。首まで上げられたジツパーが壊れそうである。

だが、体躯とは裏腹に顔は面長で美男である。長い茶髪は艶やかで腰まで長く、凜としていそうな眼差しをサングラスでクールに隠していた。

悪ぶっていないければ、相当の美男子に思える。

そして、ふかふかのミンクの黒コートを羽織っていた。かなり高級

そんな毛並みである。

この人物が、ジャイアントスパイダーズの二代目リーダーである『千葉寺かおる』であった。

後に龍一とも激突し、様々な人物のライバルトとなる登場人物である。

「でも、いきなりすぎて……」

サングラス越しに向けられる大男の威圧的な眼差しを感じながら高田が言い訳を続ける。

「カツアゲしようと小道に連れ込むまでは、兎のようにふるえていやがったんす……」

「てめーは、兎に負けたんか……」

オールバックが呆れ顔で言うと、それに高田が更に言い訳を連ねた。

「それが、あの野郎、外見は普通の高校生風なんですけど、明らかに何かの格闘技をかじってそうで……」

周囲からは「なさけねー」などと侮辱的な言葉が囁かれていた。

好き勝手に喋りだすメンバー達。

だが、たった一言がざわめきを打ち消した。

「面白い」

大柄のリーダーが初めて喋った。

囁きに近い小声であったが、それだけで皆が黙る。

体格には似合わないが、伸ばした茶髪のように艶やかな美声であった。

おそらくは、高田が述べた『格闘技』というキーワードに反応したのだろう。

その一言から豹柄の帽子を被った男が腰を上げる。

「うし、お前ら。明日、そのガキを引っ張って来い。締めるぞ。いな！」

喝を入れるような怒声に近かった。

下っ端連中が、各々了解の返事を返す。

全員の返事を確認した豹柄帽子の男が、腕時計を見て言った。

「じゃあ、明日の午後一時に、素度夢駅前に集合だ。兎がりだ！」

意気込む大宮の前にして、うんこ座りの一人が手をあげる。

「なんだ？」

「大宮さん、時間、早くねっすか。俺、起きれっかな。」

「そうか、じゃあ二時変更だ」

「おれ、二時までバイトなんで、間に合わねっスよ」

「じゃあ、お前はバイト終わってから合流な」

「大宮さん、俺二時から犬の散歩に行かないといけないんスけど」

「おかんに代わってもらえ！」

「俺も、幼稚園の妹を迎えに行かないといけないんスけど」

「じゃあ、妹を迎えに行けよ！」

「連れて来てもいいスか」

「それは駄目だろ！」

うんこ座りのメンバーがざわめく。

「あいつの妹見てみてーな」

「俺も見てー。可愛いのか？」

「俺の妹なんだから、可愛いに決まってるだろ！」

「俺見たことあるけど、将来希望できないぐらいブツサイクな幼稚園児だったぞ。こいつと同じ顔してたしよ」

「人の妹捕まえて何をぬかしてやがる、ぶっ殺すぞ！」

「可愛くねーのかよ。明日やる気なくなったわ」

大宮が眉間を摘まむ。

「こいつら馬鹿ばつかだ……。頭痛くなってきた……」

「大宮さーん」

また一人が手を上げた。

「なんだ？」

「大宮さん、眠いんで、俺、帰るっス」

「ああ、帰れ帰れ。俺も帰るから……」

こうして凶悪不良集団ジャイアントスパイダーズの集会は終了する。

「明日、何時集合って言うてたっけ？」

「確か……、ここに三時集合じゃなかったけ？」

「俺、起きれるかな」

高田が呟く。

「俺、正座やめていい……」

リーダーの千葉寺が、美少年役声優のような声で小さく呟いた。

「だめ……」

秘密結社異能社会 (前篇)

龍一がジャイアントスパイダーズの一員を殴り倒した晩の話である。

場所は素度夢駅前通り、三日月ビル。

五階建てのビルである。

一階二階は、すべて本屋だが、三階テナントには喫茶店と美容院が入っている。

四階五階は、会社事務所が幾つか入っていた。

が、五階のテナントに入って居た会社は、先週の始めに潰れてしまう。

不況の煽りは、間違いなく素度夢町にも押し寄せていた。

潰れた会社の荷物は、リサイクルショップが一昨日取りに来た。殆どが借金の形に取られたのである。

それでも会議室に置かれた大きなテーブルと数個の椅子が残されていた。

一階の本屋『三日月堂』の店長であり、ビルのオーナーの息子が、この階を借り受けたのである。

会議用の長テーブルと数個の椅子だけは、リサイクルショップから買取り残して貰ったのだ。

今夜ここで秘密結社を名乗る一団が、定例会議を開こうとしていた。そして、ビルに入っていく二人組み。

「ここが新しい本部なんだってさ」

「三日月堂のオヤジのビルだろ。こんな場所が空いてるんだったらよ、さっさと用意しろって感だぜ」

狭苦しいエレベーターで五階を目指す男女の二人組み。

昼間、龍一を尾行した二人である。

男は、ぶかぶかの白いジャージをだらしなく着込み、首には金のチーンネックレスを掛けていた。履いているのはサンダルである。

髪は茶髪で、顎には無精髭を蓄えている。

顔付きは、極道でもなく堅気でもないような、中途半端な気合が窺えた。

同じエレベーターに乗る女も男と釣り合いが取れていた。

金髪に近い茶髪はパーマが掛かりボリュームを増している。肩まで長い。

化粧は濃い、なんとも目が眠たそうであった。

そこそこ値段が張りそうな上着の下には水商売風の誘惑的な服を着ており、パツパツのミニスカートから伸び出たムチムチの足には悩ましげな黒い網タイツを身に付けている。

顔立ちは綺麗で、異性の性欲を誘う美しさが悩ましい。それも、彼女が長年積み上げてきた化粧技術の賜物ともいえそうだった。

並んで立つ男女。

女はかなり高いハイヒールを履いているが、それでも男の方が背が高い。

二人の乗ったエレベーターが五階に到着すると扉が開く。

かつて企業が動いていた部屋を見回す二人。

そこは何もなかった。

ただ広い。

二人の目には、寂しくも広いテナントフロアと、窓の向こうの景色だけが目に入る。

「誰も居ねーじゃん……」

男が茶髪を掻きながら呟くと、奥の扉が開き、おかつぱの少女が「こっちですよー」と言いながら顔を出し手招く。

二人は招かれるままに隣の部屋に入った。

「ちゅーす」

茶髪の男がチャライ挨拶をしながら片手を翳した。

女の方は「どうも」と小さく述べただけである。

隣の部屋は会議室のようだ。

大きなテーブル席には、数人の男女が腰掛ながら二人を待っていた。各自がそれぞれ挨拶を返す。

二人を呼び寄せた少女も元居た席に戻って腰掛けた。

その少女は、何故か巫女服を着ていたが、その理由は二人も存じていた。

家が神社を営んでいるらしい。この近所の神社である。

「やあ、ふたりとも、ご苦労だったね」

一番奥の席に座る優男が、軟らかい笑みで二人を迎える。

その右列に、不健康そうな顔立ちの青年が座って居た。

否、もう中年に差し掛かっている感じがする。三十歳が近そうな男である。首も腕も細い。

その隣には五十歳ぐらいだろうか、四角い顔に黒縁眼鏡、白髪雑じりの七三で、値のはりそうなスーツの男性が座っていた。一流企業の重役を連想させる堅物加減が窺える。

更に隣は、おっとりとした女性であった。長い髪に薄化粧。それでいて男性ならば全員が美人と認識できる美しさを備えていた。

母性に溢れた容姿に豊満な胸は、異性の性欲よりも、結婚願望をかきたてるタイプの女性であった。落ち着いているが、まだ若そうである。

三人の向かえに二人の女性が座っている。

一人は先程二人を部屋に呼び入れたおかつぱで巫女服の少女である。中学生一二年生ぐらいだろうか、幼さが残るが可愛らしく大人しうだ。

もう一人の女性は、凜とした顔立ちから真面目そうなイメージが強く伝わって来る。

着ているのもパリッとしたスーツである。背中まである黒髪をゴムで縛っていた。

「好きな席に座ってくれたまえ」

一番奥の優男が言った。いかにも自分が、この場を仕切っているよな口調である。

チャラ男は何も言わずに歩くと、穏やかに微笑む豊満な胸を有した女性の方に進んだ。

隣の空き席を狙っている様子である。

「おんたは、こっち」

「うげ……」

ケバイ連れの女がチャラ男の首根っこを捕まえて反対側の席に引きずって行く。

彼女は巫女服少女の隣に座るとチャラ男を無理矢理にも隣へと座らせた。

「ちえ……」

ふてくされたチャラ男は頬杖を付いてそっぽを向く。

「それでは全員集まったことだし、定例会議を開始します」

一番奥の優男が言うと、そっぽを向いていたチャラ男が、機嫌を回復させたのか訊く。

「三日月堂、それにしてもいい場所ゲットしたじゃねえか」

ケバイ女が続く。

「そうそう、今まで定例会議を開くのがファミレスとかだったから、正直なところ恥ずかしかったんだよ」

「食事も飲み物も出るから、いいかなーと思ってたんだけど、三神さんに指摘されて、急遽ここを用意したしだいで。しばらくは、ここが使えるから」

優男が苦笑いを作りながら頭を掻いて言う。

「なんだ、刑事さんもそう思ってたんだ、ファミレス会議」

「話す内容が内容だからね。他の客が怪しそうにチラチラみているのよ。恥ずかしかったらありゃしないわ」

スーツの女が困ったような顔で答えた。それに続いて今度は不健康そうな青年が話し出す。

「僕はあんな時意外は、ちゃんとした食べ物を食べないから、よかつたんですが……」

向かいに座る痩せた男を見ながら哀れそうに言う女刑事。

「あんた普段何食べてるの……。ファミレスのご飯がまともなご飯だったというの……。うちの男性刑事達と一緒にね」

彼女は健康に厳しい。バランスの良い食事を自分で作り、適度な運動も欠かさない。ナチュラルな健康マニアである。

「普段は仕事で、家に閉じ籠って居ますからね。食事の殆どがカツプ面ばかりになってしまっ……」

「売れない小説家も大変ね」

ケバイ女が哀れそうに言うが、本当のところは気に止めてないのが口調から察しられた。

彼の仕事は小説家であるが、売れてない。最近まではバイトで食いつないでいたぐらいである。

「そんなことは、どうでもいい。会議を始めんか！」

厳つい中年男性が、黒縁眼鏡を中指で上げながら言った。真面目そうな人格が一言で解る。

その後は腕を組んだまま一言も発しない。

「では、会議を始めます。まずは報告をお願いします」

三日月堂が述べるとチャラ男が我先に手を上げた。手柄を上げた事を子供の如くアピールする。

「はい、はいはいはいーいー!」

「はい、では、花巻君」

チャラ男は席を立ち自慢げに語り出す。

「昨日頼まれた蓬松高校の件、さっそくかたづけいたせ」

親指を立てて前に突き出す。満面の笑みだ。

秘密結社異能社会 (後篇)

「かたづいたって？」

女刑事が首を傾げた。

「例のガキを見つけたったことよ」

「お〜」と、皆から声が上がる。それから不健康そうな小説家青年が席を立ち、後ろに在ったホワイトボードに写真を張り始めた。

巫女服の少女『桃垣根 桜』が念写した画像をパソコンで引き伸ばしプリントアウトした物だ。

写真は四枚。男女の四人の顔写真が映っている。

一人は『政所 龍一』であるが、その名を殆どの者がまだ知らない。

他に三枚。

一人はショートヘアの少女。高校生ぐらいに窺える。

もう一人は三十歳ぐらいの男性である。

しかし、最後の一枚だけ見た目が可笑しい。

映っているのは女性のようだが、長い黒髪を靡かせ顔を隠している。咄嗟に隠したような不自然な映り方であった。

「例のガキって、この人ですよね」

ホワイトボードに写真を貼り付けてから小説家の青年が問う。

「おうよ、名前も解ったし家も解ったぜ」

「家はやっぱり、念写にあった家でしたか？」

三日月堂が訊くと花巻が「そうだったぜ」と言いながら席に腰を戻す。

「家の標識見たらよ『政所』って書いてあったぜ。名前は多分『龍一』だろうよ。他に『源治』『つかさ』『虎子』って載ったぜ。最後に名前があったから、あの家の子供なんだろうよ」

チャラくても、そのぐらいは推測できるようだ。

「花巻、おみごと。あんたもたまにはやるじゃない」

女刑事の『三神 夏子』が花巻を褒めるが、随分と上から目線だった。

いつもの事なのか、花巻は気にしていない様子である。もっと褒めると言いたげな表情を見せていた。

その間も小説家の青年が、ホワイトボードに複数の写真を貼っていた。すべて巫女服の桜が念写したものだ。

「じゃあ、コンタクトは夏子さんに任せます」

三日月堂の指示に女刑事が頷く。

「これで、今月になって異能者に成った人のうち、二人は居場所が解りましたね。」

可愛らしい笑みで桜が言った。それに続いて小説家が女刑事に質問した。

「三神さん。この人は、どうになりました？　コンタクトを取ったのでしょうか？」

写真の一枚を指差す。

龍一の写真の隣に貼られた三十歳ぐらいの男性写真である。

「彼は、超能力を拒否したわ。」

サラリと女刑事である三神夏子が言った。

「へえ、つまんねー奴。」

パイプ椅子に仰け反りながら花巻が言葉を漏らす。

花巻を無視して「キーロックを望んだのだね」と三日月堂が言う。

「どんな能力だったの、その人は？」

柔らかく微笑みながら巨乳の女性が訊いて来ると、三神夏子は遠慮なく答えた。

「つまらない超能力よ。周囲の温度を測らなくても、寸分狂いなく悟れる能力だったわ。それを引き換えに与えられた新たな趣味ってやつが、なんともね……」

「変態的だったのね……」

巨乳の女性が、頬を片手で押さえながら可愛そうにと同情的な表情を作る。

「それで、向こうさんも望んだから、キーロックしてきたわ」

「それはご苦労さまです」

三日月堂が笑顔で言うなか、小説家がホワイトボードから話題に上がっていた男の写真をすべて外し始めた。外した写真を鞆に仕舞う。今度はケバイ女が眠たそうな眼差しで三神夏子に訊く。

「先月の二人は、どうなったのよ？」

答えたのは三日月堂だった。

「あれれ、報告しなかったけ。二人とも接触積みだよ。先月は、爺さんも婆さんも、一人ずつしか異能者を生まなかったしね。直ぐ見つけられたんだよ」

「ああ、そうだったの」

「男の方は、キーロックを選んだよ。妻子が居たから、異能者同士にしか恋愛感情が持てないのが問題だったばいよ。予想以上に奥さ

んへの愛情が薄れた事に、焦りを覚えたらしい」

「あー、やっぱり結婚してる人だと、夫婦揃って異能者に成らないと、日常生活がきついよね」

「仮面夫婦は、大変ね」

ケバイ女に続いて巨乳の女が軟らかい笑顔で言った。

二人とも恋愛話には、良く食いついて来る。

「じゃあ、先月爺さんが作った女の異能者は、どうなったのさ？」

「何度か会ったんだけどね。私が刑事だから、話がこじれちゃってさ。いまだ交渉中よ。まあ、極端に悪いことはしないとと思うんだけど……、若くて血気盛んなのが危うくてね。でも、なんとか説得するわ」

三日月堂が「いつも済みません」と、三神夏子に頭を軽く下げる。

「まあ、あの子は後回しにして、先にその子に接触するわ」

そう言いながら写真の少年に視線を合わせる。写真の下には『政所 龍一』と名前が書かれ、いつの間にか住所まで書かれていた。

花巻が、紙切れに住所を書いて、小説家につきさつき渡していたのだ。

「とりあえず今日は、あと二名ですね」

桜が明るく言うと、三日月堂が表情を厳しくして話を繋げた。

「ショートヘアーの女の子は、普通の学生に見えるから問題は無いだろう。悪さを仕出かすタイプには見えないからね」

確かに明るい笑みで映っている。

どんな超能力を得たとしても、悪党に凶変するような子には見えなかった。

とても健全な笑みが、皆にそう思わせる。

ホワイトボードを眺める小説家が、声を厳しくして次なる意見を述べた。

「問題は、こっちの髪で顔を隠す女性でしょうか」

花巻が黙って頷く。

ホワイトボードに貼られた写真の中に、同じような写真がある。長い黒髪で顔を隠した女性の写真である。

しかも、複数枚、似たような写真が貼られていた。

「何度念写してもこうなんです。私の念写に気付いて顔を隠すんです」

「桜ちゃんの念写、写される少し前から、なんとなく見られている感覚でわかるしね」。あ、電池切れた」

最後の一言は、全員に流される。

少し間を置いてから三日月堂が話し出す。

「怪しげなのはわかるが、もう一人の少年が気に成る。やはり彼を先行した方が……。闇の念写がね、とても嫌な感じがするのでよ」

「そのお兄ちゃんの場合、その後の念写は全部それなんですよ」

「全部、闇しか写らない……か」

小説家が受け取っていた画像を携帯電話でチェックする。

しかし、桜から改めて貰ったものはすべてが真っ黒だった。闇しか写っていない。

「花巻君、燐火さん、暫くの間、その少年に付いて居て貰えませんか」

花巻とほぼ同時に、ケバイ女も「いいけど」と了解する。

「三神さんを接触させる前に、どのような人間か調べたいです。超能力が何かも知ってからのほうが、安全かもしれません」

「三日月堂、今回は慎重だな」

「当然ですよ、花巻君。今回は今までとパターンが違います。いきなり三神さんを近づけるのは危険かもしれませんね。三神さんの能力は、我々の目的には欠かせませんから」

自分の超能力に触れられた三神夏子が話しに加わる。

「持ち上げすぎよ。私の能力はおまけね。確かに無いよりは有った方が、みんなの為に成るけどさ」

謙遜している彼女に三日月堂が「いいえ、世界の為に成りますよ」と微笑みかけた。

照れて頬をピンクに染めた三神夏子が三日月堂から視線を外す。

「それはそうとよ。そろそろ今月分の生活費、振り込んでくれねー？」

空気を無視した花巻が、そう言いながら親指と人差し指で輪を作って見せると、下品に微笑む。

「解りました、近日中に原稿を三日月堂さんに渡しときますよ。あはは……、換金お願いします」

答えたのは売れない小説家だった。

三日月堂が「はい、わかりました」と返す。

「では、そろそろ夜も更けてきた、中学生も居るのだから解散の時間だろう」

渋い声で言ったのは、堅物そうな中年男性だった。

会議中は腕を組んだまま一言も発しなかったが、最後の最後で発した言葉には威厳が感じられた。

そして、席を一番に立つ中年男性。

ピシッと決めたスーツ姿だったが、中年男性の下半身はすっぽんぽんであった。

男らしくズリ剥けた何が揺れていた。

何も履いていない。

それで有りながら微塵も恥じていない、堂々と胸を張っていた。

流石の光景に、女刑事と巫女服の少女が視線を逸らすが騒ぎ出す素振りは無かった。知っていたのだらう。

「朝富士さん、そのまま帰るのですか……?」

「馬鹿を言え、三日月堂君!」

朝富士と呼ばれた厳つきも堅物そうな中年は、頑固そうに反論する。

「私は変態だが、モラルを心得ている。地位も名誉も家族も居る変態だ。こうして下半身を開放して心置きなく露出するのは、キミらのような理解ある人物たちの前だけだ。一般市民の前では、恥ずかしくはないが絶対に行なわない。何が犯罪に当たるかぐらい心得ている。詰まらん質問を控えてくれたまえ!」

なんとも堂々とした発言だったが、皆が苦笑っていた。

「心得ているなら、早くズボン履いて帰れよ……」

花巻の言葉は、ごもつともである。

「そうだな。女性人の前だが失礼してズボンを履かせてもらっよ」
そう述べてテーブルの下に置かれたズボンとパンツを履き始める。

これを最後に、今宵の秘密結社会議が終了となった。

りゅうじ

三日月ビル五階会議室。

ほんの三十分前まで、年齢性別ともにバラバラな面々が揃って秘密結社と名乗り、怪しげな会議を開いていた。

秘密結社異能者会。彼らの目的は、産まれ来る異能者たちの管理である。

今宵集まった全員が異能者であり、他の異能者が超能力で悪事を働くのを善しと思えないメンバーであった。

何故に善しとしないかは、人それぞれであるが、利害が一致しての集まりであるのは確かであった。

このメンバーには、間違いなく悪党だけは居ない。それだけは全員が自負している。

「やっかいな事になったな……」

メンバーに三日月堂の愛称で呼ばれる男は、一人会議室に残り窓の外を眺めていた。思わず溢す言葉に暗いものが混ざる。

五階の窓から見える景色は、駅前大通りを駆け抜けて行く車のヘッドライトばかりであったが、その灯りが映し出す街角には、まだまだ人通りがチラチラと見られた。

「私の予想が正しければ、嫌な展開に進んでいるやも……」

振り返った三日月堂は、ホワイトボードに貼られたままの写真に目を移す。

三日月堂は、まじまじと龍一の写真を凝視していた。

そんな中、静かな会議室に力チャリとドアノブが廻される音が響くと、扉を開けて二人の男女が入って来た。

「三日月さん、桜ちゃんを送ってきました」

「ご苦労さまです。和人君、夏子さん」

小説家と女刑事である。

二人は未成年である巫女服少女の桜を自宅まで送って来たのだ。

この春、中学生に成ったばかりの少女を夜な夜な一人で帰すわけには行かず、刑事である三神夏子が送ってくると言い出したのだが、今度は小説家の千田和人が、女性だけでは心配だと二人で送る事になったのである。

三日月堂は優男だが、小説家の千田和人は優男を通り越して痩せ男である。雄としては、兎に角弱そうだ。

そのような脆弱な男が付いてきても、夜の不安から女子二人を守るのだからかと、刑事である三神夏子は思っていたが、彼女は千田が自分に好意を抱いている事に気づいていない。

刑事としては鋭い感を持ち合わせているが、事自分の恋愛に関して

は鈍い様子である。

会議室に帰ってきた三神夏子が、ホワイトボードの写真を見ながら三日月堂に問う。

「ねえ、三日月堂。何故に会議の時に、この少年について語らなかつた？」

「どういう事ですか？」

小説家の千田が、何を話し出したのかと二人に訊く。どちらでもいから内容を明確に答えてもらいたい様子であった。

三日月堂が答える。

「いやね、あの二人が思ったよりも早く少年を特定したのでね。それを聞いたなら、どうやら私の勘違いだったようでしたし」

「じゃあ、昨日言っていたのは、貴方の勘違いだったの」

三神夏子の言葉に三日月堂は「多分」と答えた。

「多分って、どういう事ですか？」

まだ話が見えない千田が再び問う。

「この写真の少年がね、私の知り合いというか、店の常連というか、まあ、良く似ている子がいてね」

「え、そうだったんですか？」

「昨日、それについて夏子さんには言っておったんですがね。まあ、似てると言っても、顔立ちは似ているが、感じが随分と違うと言っか……」

実に歯切れが悪い。

「なんですか、それにしても曖昧な表現ですね」

「似ているが似ていないって事なの？」

小説家と女刑事が、はっきりしない三日月堂の話に怪訝な顔を見せる。

「似ているけど、目付きが違うんですよ」

「目付き、ですか……」

「そう、目付きの感じが違いすぎて、別人に見えるのですよ」

「どんな風に違うの？ もっと具体的に表現できないかしら」

三神夏子に言われて少し悩んだ三日月堂は、両手の人差し指で自分の両目を釣り上げながら言った。

「もっとこう、目が鋭いと言いますか、尖っていると言いますか…

…」

二人は三日月堂の作り面を見た後に、ホワイトボードの写真を見直す。

「こっちの少年は、随分と穏やかと言うか、優しげと言うか……。
僕が知っている少年と違うのだよ」

「不良少年、そんな感じなのかしら？」

「いや、どちらかといったらね、一本筋が通っていきそうな感じなんだよ。頑固な強さを秘めた顔付き。こんなにもろそうな少年じゃないんだ」

小説家がワイドボードから龍一の写真を一枚取って言う。

「写真だから、イメージが違ったとか？ 写り方の問題では？」

小説家の言いようにも一理ありそうである。

「僕もそうかなと、最初は思っていたんだけど。花巻君の報告を聞いてね、別人だと思ったんだよ」

「だから、会議では言わなかったのね」

「何故、別人と思われたんですか？」

「少年は自分の名前を僕に『りゅうじ』と名乗っていたからね」

「『りゅうじ』ですか、じゃあ名前が違いますね」

『龍一』でなく『りゅうじ』。

「三日月堂、少年のフルネームは知らないの？」

「残念ながら、訊いていません。携帯電話の番号とメールアドレスは交換しているのですがね」

「じゃあ、少年が名前を偽っているとかでしょうかね？」

「和人君、それは考えられないよ。彼と知り合ったのは一年以上前だ。お客として本屋に来ているのは、それよりもっと前からです。彼がわざわざ嘘を名乗る理由は無いでしょう」

そのような嘘を付く必要が無さそうだと二人も悩む。

「じゃあ、三日月堂が、少年の名前を間違えて覚えていたとかはない？」

「それはないと思いますよ……。私は人のお前を間違える事が少なくてね。そこそこ自信があります。それに彼が来店するたびに名前を呼んで挨拶しているからね」

「間違えて名前を呼ばれば、本人も流石に訂正するか……」

「双子とかはないかしら？」

「鶴巻君の報告だと、表札にはりゅうじはなかったよね」

「そうか……」

「れなら会議の時に、言っても良かったんじゃない？」

再度同じ事を問われる。

「そりゃあ夏子さん、もしも間違いだつたらりゅうじ君に迷惑が掛かる。名前と顔が少し似ているだけだからね。それに、その少年が異能者とは確定していないしね」

確かに彼らから見て龍一が異能者である事は、確認が取れていない。桜の念写だけが、それを示しているにしか過ぎない。

「そうか、いつもなら直ぐ、本人に訊きますものね。貴方はパンドラ爺さんが婆さんに、超能力を貰いましたかつてね」

「そうそう、燐火さんが居れば嘘は通じない。質問だけで異能者がどうかは判明ますしね」

燐火とは、あのケバイ女である。

友錦 燐火（ともにしき りんか）。

彼女の超能力は、嘘を感じ取る能力であった。

人間嘘発見器である。

嘘の内容や何が真実かは解らない。

しかし、嘘を付いているか否かは百パーセント解ってしまう。実に便利な能力である。

元々彼女は駅裏の小さなスナックに勤めていたが、超能力をプレゼントされると、仕事を辞めた。

今は秘密結社異能者会から報酬を貰い暮している。

嘘発見能力を異能者会の為に使う。超能力を人にばらさない。これらが条件で、彼女は一月にして五十万円の報酬を貰っていた。

彼女と行動を共にしていたチャライ男、はなまきりくお花巻陸男も同額の報酬を貰っている。

それらの資金源が異能者会に有るのは、すべて売れない小説家の千田和人が提供しているのからだ。

何故にそれ程の金額を売れない小説家が出せるかは、彼の超能力に秘密があった。

千田和夫の超能力は、自分が執筆した小説の生原稿を黄金に変える能力なのだ。

純金を作り出せるのだ。

しかし彼は、生原稿以外を黄金に変えられない。

ワープロやパソコンでプリントアウトした原稿は、何故か黄金に変わらない。

自分で筆を取った原稿しか金には変えられないのだ。

だから千田は、売れない小説家でありながら食いぶちには困っていない。

本当は、自分で書いた小説が売れて、大御所小説家として印税で暮しながら物語を作り続けたいのが本望であった。

だが、なかなか人生とは上手くは行かない。

今彼が書く小説は、原稿ごと黄金に変えたほうが金になるの現状だった。

まあ、バイトをしながら読んでも貰えない小説を書き続けるよりは、まだと本人も最近では思い始めていた。

困ると言えば、金に変えた原稿を千田本人が現金に変えてばかりいると怪しまれる点であった。

普通の家柄に産まれた千田が、ゴールドショップにちよくちよく純金を持ち込めば怪しまれる。

そこで考えられた換金法は、資産家の息子である三日月堂が代わって換金する事であった。

彼なら何度も純金を現金に換金しても、親の金を息子が使い込んでいく程度にしか怪しまれないからである。

「それにしても、この闇の念写さえなければ、いつもと同じ段取りで確認できるのですが……」

黒い写真を手に取り、千田が残念そうに言う。

「まあ、今回は慎重に行こうと決めただから、そうしましょう。ねえ、二人とも」

三神夏子の言葉に二人の男が頷いた。

「でも、三日月堂。念は入れて損はないでしょう。その『りゅうじ君』の電話番号を教えてくれないかしら。私の方で彼も調べておくからさ」

刑事としてのルートを使うのだろう。職権乱用だが、今は心強い手段である。

国家権力は、やはり偉大である。

「そうですね。本当はプライベート情報だから、教えるのは心苦しいのですが、事が事ですからね……」

と、言いながら三日月堂は携帯電話を開いて番号を女刑事に見せる。

夏子は番号を手帳にメモると「じゃあ、私も帰るわね」と言って踵を反した。

扉の前で「おやすみなさい」と手を軽く振ると会議室を出て行ってしまう。

「本当に、ただ似ているだけでしょうかね？」

女刑事を見送った小説家が、まだ今一つ納得行かないのか、話を蒸し返した。

「同一人物か、似ているだけか、言い出した僕にも判らないぐらいです」

「まあ、『りゅうじ』は夏子さんに任せて、『龍一』は、あの二人の様子を見てもらいましょう。ちゃんと調査すればはつきりし

ますよ
「

「あの二人に、この事を知らせますか？」

花巻陸男と友錦燐火にだ。

「追々僕から話しますよ」

「その辺は貴方にお任せしますよ、三日月堂さん」

そう言いながら小説家も出口を目指す。

「では、私も帰ります。また」

「はい、おやすみなさい」

小説家を見送ると、三日月堂はまた独りとなる。

その後も彼は、五階の窓から走る車のヘッドライトを眺めていた。

やはり、闇の念写が脳裏から離れないのだ。

不安が強く残った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845y/>

変態超能力をプレゼント

2012年1月10日07時58分発行